

524  
416



始





永田秀次郎著

建國の精神  
小還札

實業之日本社發行



永田秀次郎著

建國の精神に還れ

實業之日本社發行

大正  
15. 2. 5  
内交



524-416

### 序

今回我々同志の者が相集まつて、建國祭の舉行を提唱し次の如き宣言書と綱領を決定した。

#### 建國祭宣言書

悠々たる哉我建國、遠く有史以前の神話に出でて遙かに天地開闢の古に逆る。高明なる哉我建國の理想、平和と光明とを表現する天照大御神を天祖とし、明知と仁愛と、勇武とを象徴する三種の神器を奉じて、皇統連綿、君幹臣枝、億兆心を一にして世々厥の美を濟し天壤と共に窮まる所なし。萬機公論に決するの宏謨、君民同治四民平等の大義、總て皆帝國肇造の當初より定まる所、王道蕩々八肱を光被し之を中外に施して悖らざるもの、是れ我等が最も透徹せる理解を以て我建國の精神を讃



美する所以なり。然りと雖も四時は代謝し世態は變遷す、我建國の精神を明徴にし之を永遠に遵行して謬なからしむるには須らく古今に變通し、時代に適應せしむるの用意を要す。金甌無缺の國史は偶然にあらず、是れ皆我等祖先が忠實勇武國を愛し公に殉ひ、時勢を洞察して其宜しきを制したるに由る。儒教佛敎耶蘇敎の傳來に對する態度の如き、元寇の役に於ける舉國一致の如き、大化の新敎、明治維新の英斷の如き、何れも皆我等祖先が克く大業を獎勵し、達識果敢、斷じて之を行ひし努力の結果にあらずるはなし。今や帝國內外多事、我等の責務洵に重大なり。右傾を警しめ左傾を制し、中正堂々建國の精神に更生し、以て時代の病弊を一掃せむ事を期せざるべからず。

惟ふに世界大戰に於ける各國民の殘忍と憎惡とは、泰西文明に對する我等の敬意を抛擲せしめたり。今や歐洲の天地は小邦分立して安定する所なく、人心恟々として内は貧富の鬭争に苦み、外は獨立の維持に汲々たり。露國の共產思想、伊國の國粹運動、英米の民主政治、總て皆其國特殊の事情と國民性に依るもの、單に他山の石た

らしむべくして、毫も則るに足らざるなり。我等は我等の脚に依りて歩まざるべからず。模倣は自殺なり、自ら濟ふの所以にあらず。況んや其短所缺點のみを模倣するに於てをや。我を助くる者は我なり、他にあらざるなり。我等の進むべき大道は唯建國の古に復りて之を現代化するにあり。紀元節は實に神武恢弘の偉蹟を回顧すべき我國特有の大祀なり。之をして單に形式の一祝日たらしむべからず。而して我國民の腦裏に建國の大精神を反省せしむるには紀元節より適切なるは無し。最も古き此大精神をして年と共に新たにして又年々に新たならしむるは、實に我等が之を祖先に應へ之を子孫に傳ふる所以の職分なり。我等は此の如き確信の上に立ちて茲に建國祭の舉行を提唱す。願くは全國民諸君の賛同を得て我高明なる建國の大精神をして益々其光輝を發揚せむことを。

紀元二千五百八十五年十二月七日



## 建國祭綱領

- 一、建國祭は、日本建國の理想に基き、高明なる國民精神を發揚するを以て目的とす。
- 二、建國祭は、毎年二月十一日を期し、全國民の年中行事として之を行ふ。
- 三、第一回建國祭は、大正十五年二月十一日之を行ふ。

そして之を全國各府縣知事郡長市町村長、在郷軍人、青年團、少年團、神道佛敎基督教其他の敎化團體に配布して協力を求めた、其數凡そ十八萬に達して居る。

然るに私が料らずしも同志の推す所となつて、第一回建國祭準備委員長となつたのである。即ち此機會に於て聊か平素の所懐を述ぶる事は必ずしも無益ではなからうと思ふ、蓋し我國民の多くの者は未だ嘗て我建國の精

神を深刻に反省して見た事が無いのではあるまいか、或は又建國の精神は日光の如く水の如く餘りに普遍的なるが爲に却つて何等の有難味を感じざるのではあるまいか、そして徒らに外國の新奇なるものを需めて自家の至寶を遺るゝのではあるまいか。

有體に白狀すれば私の如きも、少年時代には我神話の奇怪なる事を見て、之を無價値のものと考へた。然るに其後に至り神話は總て其民族の理想を語るものである事を知つて、初めて雲霧の霽れたるが如く、其貴重なる所以を知つたのである。そして我々祖先が古代に於て抱懷せる此理想を現代化して、之を今日に適應せしむるは實に我々の責務である事を知つた。

我々が我建國の精神を反省するには、何時を以て適當の期日とすべきであるか、之に對して或は一月三日の元始祭が適當であるとか、或は神武天皇が



皇祖皇宗を祭つた二月十七日が適當であるとか、其他二三の説がある、而して紀元節を以て建國祭を行ふに對しては有力な反對者もある、其理由は神武天皇が天業を恢弘した事は決して我國の建國では無い、之を誤解せしむるの虞があるから、紀元節は適當で無いと云ふのである。然るに我々が度度會議の結果矢張り紀元節に之を舉行する事とした、蓋し我建國は天祖に肇まるものであつて、神武天皇が唯其天業を再び弘めたものであると云ふ事は極めて明白で何等の異議は無いが、我々は神武天皇御即位の紀元日としての此紀元節を通じて、更に建國の精神を反省する事が最も通俗で且つ常識的である。我々は紀元節には神武の御偉業を回顧する、即ち我國の古代の事蹟を回顧するのであるから、此日に於て併せて神代の事をも回顧する事が極めて自然であると考へたからである。

私の此書は初め建國祭の宣傳の小冊子として刊行したいと考へたが、書中の所見は全たく私の一個の獨斷に出づるものが多いので、之を個人の著作とする事を適當と思ふた次第である。

大正十五年一月元旦

著 者 識



目次

第壹章 我國の現狀……………一  
第貳章 建國の精神……………一五  
第參章 國民的信仰……………三〇  
第四章 外國の教訓……………四三  
第五章 模倣は自殺なり……………七九  
第六章 我國民の進路……………九〇

目次

— 目次終り —



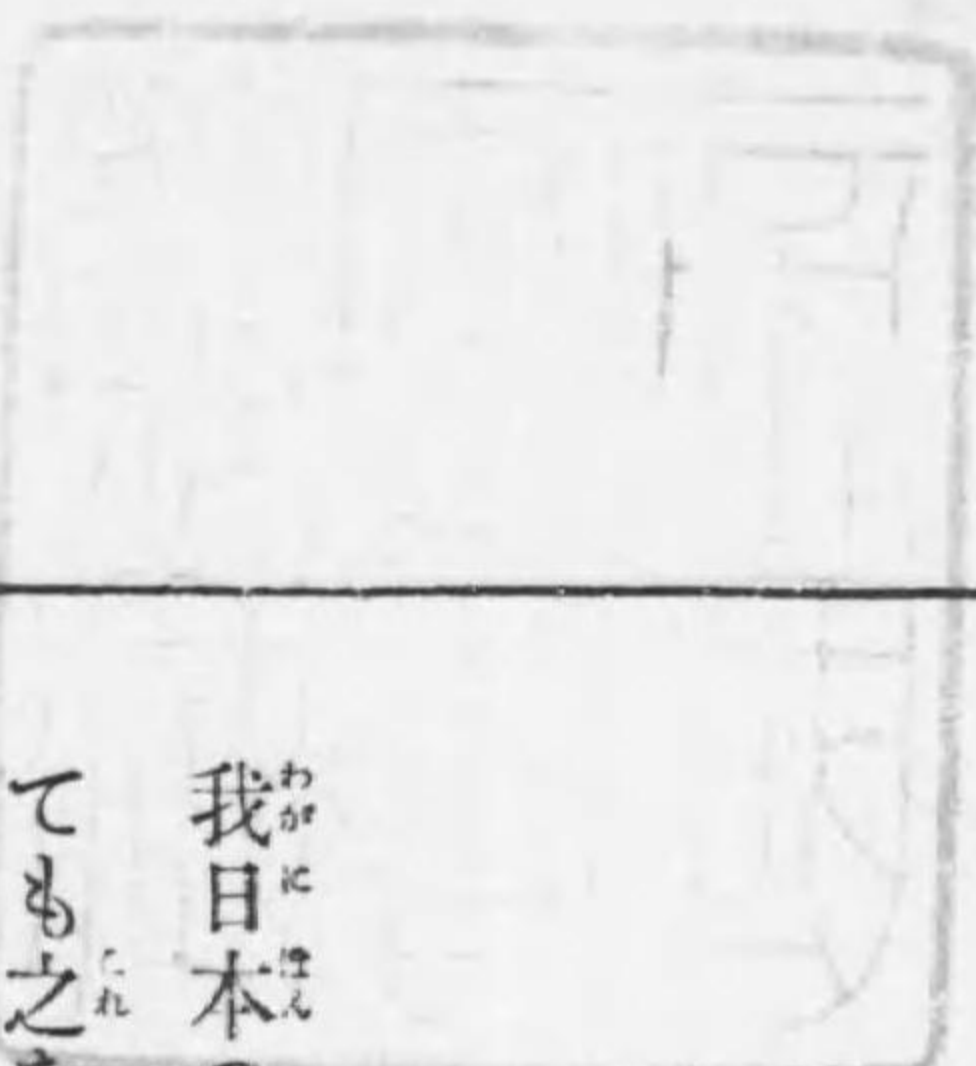
# 建國の精神に還れ

永田秀次郎著

## 第壹章 我國の現狀

我日本の今日は實に重大な時機であります、之を國際的地位から見ましても之を國內的の現狀から見ましても、我々は洵に眞劍になつて考へて見なければならぬ時であると思ひます。

先づ之を國際的に見まして我國の世界に於ける地位如何と申しますると、日本は明治維新以來僅かに五六十年の間に於て、長足の進歩を致しまして





日清戦争に依りまして東洋の強國となり、日露戦争に依りまして世界の強國となり、更に世界大戦争に依りまして各國が疲弊しましたから日本は自然に其地位を高め、今や世界の五大強國の一と云はれ時としては世界三大強國の一とも云はれて居ます。三大強國と云へば米國と英國と日本とを云ふのであります、考へて見ますれば日本も俄かに豪らくなつたのであります、維新前迄は支那國から東夷とか倭奴とか蠻貊とか云はれて居ましたものが、僅かに五十年の間に今日の地位となりましたのは慥かに喜ばしい事でありませう。併し乍ら明治大帝の御製にもあります通り「事無しと弛ぶ心はなか／＼に仇あるよりも危ふかりけり」で或意味に於て我國の現状は日清戦争當時よりも日露戦争當時よりも一層危険な状態であると思ひます、今日日英同盟も無くなつた以上我國は全たく一本立である、一本立も

宜しいが俄か紳士の成金が世間から憎まれる様に日本も亦世界の憎まれる者である、イヤ憎まれ者であると思つて氣を付けなければなりません、好戦國民であるとか第二の獨逸であるとか云はれて誠に迷惑至極であります。御承知の通り日本は一昨年七月一日から米國の移民法によつて甚だしき侮辱を受けて居ます、米國人が口癖の様に云ひます自由とか平等とか機會均等とか云ふ事は白人間に通用する言葉でありまして黄色人には通用しません、又濠洲でも白人濠洲主義と云ひまして黄色人は入れませぬ、軍備縮少の聲は喧ましいが新嘉坡では英國が新たに要塞を築造するさうであります、「帝國と締盟列國との交際は益々親厚を加へ」と云ふ演説は毎年總理大臣が議會開會の初頭に申されますが我我は之を文字通りに理解して居ます、併し乍ら之と同時に米國の移民法や新嘉坡の要塞築造などの事實は之を事實



として記憶して置かねばなりません。更に支那則ち中華民國との關係を顧みますると同種同文とか唇齒輔車とか共存共榮とか互に辭令を交換して居ますがどうも甘く親善が行はれませぬ、何事かある度に排日排日と叫ばれ國耻記念日と云つて騒かれる始末で、斯かる状態では一旦緩急のある場合に日本が物資を支那に仰ぐ便宜が失はれます、之は重大なる痛患であります、又極東露國との關係は最近國交を回復致しましたが何分共產主義國で勞農政府と一身同體と見るべき第三インターナショナルは各國を共產化して各國に革命を起さしむるが其使命であると思つて之を宣傳し實行して居るのであるから中々物騒な油斷のならぬ事柄であります。斯く周圍の事情を考へて見ますると世界に於ける我國の國際的地位と云ふものは中々容易なものではありません。日清戦争の時には歐米の諸國は多くは日本の勝

利を喜んで居ました、併し乍ら其後には三國の干渉があり遼東還附が行はれた。日露戦争の時には少くとも英國は露國の衰頹を希望する關係上、日本の勝利を希望して居た、然るに今後若し日本が何れの國と戦争する場合がありと考へて見ましても世界中に日本の勝利を喜ぶ國は全たくありません、此感情と云ふものは實に恐ろしいものである、三大強國の一となつた事は嬉しいが日本は今後何人にも依頼する事が出来ない、凡て自分の力で立つて行かなくてはならぬ。

更に三大強國の一と云つても、其内容を考へて見ると頗る心細いものである、何となれば各國の國富に就ても米國が七千億圓英國が五千億圓佛國が二千億圓伊國が六百億圓日本が五百億圓と云つて見ると滅多に三大強國とか五大強國とか云へた義理では無い。又富源に就て考へて見ても第一



食料品の米さへも年々數千萬圓の輸入を必要とするのみならず石炭も不十分、石油も鐵も不十分、砂糖黍も無ければ棉花も無い、棉花の如きは年々六億圓も輸入して居る、そして人口は年々七十萬人の増加を示して居る、此の如く貧弱なる資源の中に人口の増加率が高いのであるから自然に生活問題が緊切となつて来る、尙最近一二年間の輸入超過の狀況や正貨漸減の實際を見ても我國の現狀は中々容易のものでは無い、斯様な情勢であり乍ら尙且つ五大強國の一とか三大強國の一とか云ふ所以のものは、第一に日本の地理的の位置が東洋に隔在して居る爲め、日本を除外して東洋を談ずる事能はざる地位にある事と、第二には燃ゆる如き愛國心と進取向上の氣力を有し儼然たる獨立國の威容を備へたるが爲である。換言すれば舊大陸の英國新大陸の米國東洋の日本と並稱して之を三大強國と云ふのである。

故に國際的の日本の地位は敢て自ら卑下するには及ばぬ、併し乍ら飽迄も努力し奮闘し其特徴たる愛國心と向上心とを彌が上にも緊張せしめなければならぬのである。

次に國內的に我國の現狀を大觀して見ると、是れ亦明治維新以來百事頓に進歩して、其物質的文明に屬する點に於ては、教育上軍事上或は政治上經濟上長足の進歩を爲したる事固より疑を容れない。併し乍ら審かに其内情を察して見ると實に深憂を禁ずる能はざるものがある、第一我國が立憲政治を行つてから既に三十年以上を経過して居るが我國民は果して自治の精神が十分に發達して居るであらうか、是れ頗る疑問である。立憲政治は輿論の政治だと云ふ、然らば其輿論なるものが果して健全であるか、今日輿論を代表するものは先づ政黨と新聞である。然るに我國民が果して既成政



黨に如何程の信頼を拂つて居るであらうか、政黨は弊害多きもの、政黨は偏頗な事をする者、随つて眞面目の仕事には成るべく政黨員を除外すべきものと思つて居る。此の如く政黨の不信用なる事實は決して政黨其者のみの不名譽では無い、實に立憲國民自身の不名譽と言はねばならぬ。何となれば國民を離れて政黨は無い、政黨の腐敗は之を匡正しない所の國民の責任である、爾の貴重なる一票を以て之を矯正しない所の國民の責任である、又我國民が所謂社會の木鐸である所の新聞に對する信用は如何と云ふに是れ亦甚しく不信用である事は疑ふの餘地は無い、然れども讀者を離れて新聞は無いのである、讀者が無ければ新聞が存立しない、新聞の惡徳は讀者が之を寛容するからである。否時として其不都合なる記事を歡迎するからである。故に政黨の腐敗も新聞の惡徳も要するに國民自治心の發達しない

結果である。普通選舉は眼前此次の總選舉より實施せられむとして居る、我國民は此機會に於て覺醒せなければならぬ、爾の處女權を汚す事勿れ、特に新有權者の責任は重大である、此機會に於て清新にして混濁せられざる代表者を議會に送るの覺悟が無くてはならぬ。若しも普通選舉の結果が何等從來に異なる所なくば是れ則ち不正行爲の可能者を三百萬人より一千二百萬人に増加したるのみであつて、政治の腐敗を四倍するに過ぎないのである、我國民の責任は實に重大であると言はねばならぬ。更に經濟上並に思想上に就て我國の現狀を考へて見ると、工業上に於ては同盟罷業の續發あり農業上に於ては小作爭議が行はれる、所謂勞働者資本家間の爭議に於て互に諒解を缺くの傾がある、此傾向は最も注意すべき點である、元來露國の勞農政府では勞資問題は革命に依るにあらざるは解決の



見込なしとの絶對的主張を持つて居て、露國自身を革命によつて無産者獨裁政治を行つたのみならず、他の諸國をも革命せしめむとして居る。獨逸の如きも亦階級闘争を唱へて革命したのである、併し今日の獨逸は全く共產主義の迷夢から醒めて階級闘争は唯一時の手段であつて、今日では其必要が無いと言ひ、又共產主義的施設は全部失敗に歸して今日では何人も問題とせない迄に變化して居る。露國のみは今尙革命の必要を唱へて居るけれども他の各國では何れも經濟問題の解決は「革命」に依らずして「進化」に依るべきもの則はち破壊に依らずして改善に依るべきものとして居る、所謂 Revolution にあらずして Evolution にありと云つて居る。我國の労働問題の如きは固より歐米の大工業組織國とは其實情を異にして居るから、労働者の地位の向上は勿論破壊に依るべきものではなくして、改善に依る

べきものである事は言ふ迄もない、之に就ては労働者も資本家も共に反省すべきである、先づ一たび自己に反省して後の要求で無くてはならぬ、之が實際的解決は今後最も苦心を要する點である。労働問題に次で注意すべきは國防問題に對する國民の理解である、大戦争の當初に米國のウエルソン氏が此戦争は軍國主義に對する民主主義の戦争なりと唱へてから、軍國主義が非常に批難された、其側杖を喰つて兎もすれば軍人が輕蔑せられ國防が閑却せられむとして居る。併し乍ら世界の平和を確保せむとする國際聯盟も肝腎の主唱國たる米國が脱退して仕舞つて頗る權威なきものとなつて居る、又華盛頓軍備縮小會議でも陸軍の縮小に就ては佛國の絶對反對の爲に行はれず、漸やく海軍縮小を協定したけれども各國は其精神を守らずして其條文をもぐる事ばかりを考へて居る、則はち



補助艦建造の制限が無いと云つて盛んに補助艦を造つて居る。又英國では此海軍縮少の範圍外だと云つて海軍根據地を新嘉坡に建設して居る。最近の世界各國は互に自國防衛に腐心して一日も國防の充實を忘れない。佛國が陸軍並に空軍に於ける破産的大設備の如き。伊國の武裝的政治の如き。英米の各學校に於ける將校教育團 Officer Training Corps の如きを見ても如何に其國防に熱心なるか、わかるのである。獨逸の如きは敗戦の爲に空軍を禁止せられ陸軍は現役兵十萬人に制限せられて居るから止むを得ず警察官と云ふ名義で此制限をもぐらうとして居る位である。我々日本人は餘りに馬鹿正直であつてはならぬ。我々は飽迄も軍人を尊敬し軍隊を尊重して彼等の士氣を鼓舞し、義勇奉公の念を充實せしめて以て國防の安全確保を圖らねばならぬ。此點に就ても我國民が國防の必要と云ふ事に就て十分な

る諒解を持たなくてはならぬのである。

次に我國體に對する理解に就て、十分之を徹底せしめて置く必要があると思ふ。夫の不祥なる虎の門事件の如き、我國體を理解せざる一青年が發作的衝動に依つて、かゝる不祥事件を惹起したる事は國家の爲に遺憾である事は勿論、其一青年の爲にも實に遺憾である。彼は外國の事を知つて日本の事を知らない、彼は全たく我建國の精神を理解せない、我皇室の地位を知らない、此無知無理解が遂に此不祥事件を惹起すに至つた事は、洵に畢世の恨事である。共產思想と皇室の存在とは全たく別物である、無關係である。我々が共產思想に反對するは我國體と相容れざる爲では無い、大化の新政に於ける土地國有は或意味に於ける共產思想の採用である。故に我々は共產思想が國體と相容れずとして反對するにあらずして、事實上人



間の實生活に適合せない爲に反對するのである。我日本國民が今日に於て我國體に關し我建國の精神に就て透徹せる理解を有する事が、實に現實の必要を有するのである。

以上我々は我國の現狀に對し之を國際的並に國內的の兩方面より觀察して、極めて、悠揚迫らざる遠觀を爲して見ても、現今の我國の地位は實に重大なる時機に立つて居る事が理解されるのである。苟も憂國の士は此重大時期に於て國民的覺醒の實を擧ぐるに於て遺憾なきを期せなければならぬと思ふ。

## 第二章 建國の精神

我國の現狀は略前章に述べたるが如くである。之を悲觀的に心配して見ると際限なく心配すべき理由がある、實際政治的にも經濟的にも思想的にも憂慮に堪えざるものがある、之を以て世間では往々未曾有の國難來を叫ぶ者のある事は必ずしも無理では無い。併し乍ら我々の祖先は神代の昔から、如何なる國難に遭遇しても徒らに悲觀したり哀號したりする事なく、却つて自ら勵み自ら努めて談笑の間に其運命を開拓し來つたのである。即ち我神代史に於て天祖天照大御神が天石窟に隠れさせ給ふた時は、天地俄かに晦冥となりて群妖悉く起り、眞に世界の破滅となつた大變事に遭遇



した、其時に八百萬の神々が天安河原に集まりて評議の末に、火を焚き鶏を鳴かし歌を歌ひ踊を踊り其歡び笑ふ聲が高天原を揺かせたので、天照大御神も不思議に思はれて岩戸を細目に開けられたのを、手力雄の神が之を引開け引出し奉つたので、天地が忽ち明るくなり八百萬の神々の顔が皆白く見えた、「面皆白し」が今日の「面白」の語源であると云ひ傳へて居る、實に面白い話である、此の如く我々の祖先は神代の昔から物に屈托せず極めて樂天的であつて努力して自己の運命を開拓し來つたのである、故に我々は今日内外多事の秋に際しても少しも悲觀する必要が無い、深く自ら信じ自ら努めて自己の運命を開拓すべきである、然らば則ち如何にせば可なると云へば、我々は唯「建國の精神に還れ」と叫ばんとするものである、我建國の精神は實に高明なる精神である、之を現代に適用して少しも差支

0

の無い精神である、之を世界に推し弘めて少しも不都合の無い精神である、此精神を述ぶるに先ちて我々は豫め心得て置かねばならぬ事がある、それは則ち神話の價值如何と云ふ問題である、凡そ神話なるものは、世界の何れの國の神話を見ても總て現代の理屈に合つて居ない、支那の天皇氏は一萬八千歳の壽を保つと言ひ、埃及の國王は太陽の子であると云ひ、羅馬の祖先は牝狼に育てられたと言ふが如き、何れも皆今日の常識では理解する事が出来ないものである、併し乍ら古代の文明の程度に於て此の如き事を信じて傳説し來つたと云ふ事は、皆其國民の理想を語り嗜好を語り希望を語つて居るものであつて、此の如き事柄を想像し信用し來つた所に其國民性がよく寫し出されて居るのである、若しも其國民性の首肯し能はざる傳説ならば必ずや亡び行つたに相違ない、斯



く考へて見ると神話は實に貴重なる價値を有するものと言はねばならぬ。神話は實に國民の理想を語るものである。然らば則ち神話を通じて見たる我國民の理想は如何と云ふに、我々は第一に我國民は平和を好愛するものである事を明かにせなければならぬ。

外國人は往々にして我々を目して好戰國民であると云ひ、或は軍國主義であると言ひ、又は第二の獨逸であるとも言ふ。之は主として日清日露の戦勝を見て驚愕の餘りに此の如く言つて中傷するのであつて、實に間違つた觀察である。徳川三百年の間一切海外の發展を禁壓した爲に、明治維新となつて眼を覺まして見ると日本は土地は狭く、資源は貧弱で人口が澤山、てそして歐米の遠方からの勢力が潮の如くに周圍に壓倒し來つて居つた。此情勢の下に其獨立自存を維持する爲には、如何にしても鞏固なる愛國心

に訴へて、外敵の壓迫に對抗し獨立の根柢を作らなければならなかつたのである。則ち自ら生きむとするの止むを得ざる戦争である。我々の國民性は君國の爲ならば水火を辭せざる燃ゆるが如き愛國心を持つて居る、併し乍ら其本體は先天的に平和を好み天然を愛し階級的の觀念極めて薄く、春は東郊に櫻花を探り秋は西山に紅葉を賞し、衆と共に歡樂する事を好む國民である。而して此國民性が神代の昔から神話によつて表はれて居るのである。

我々は天照大御神を天祖として居る、其天祖の孫の瓊々杵尊が所謂天孫降臨して瑞穂の國に降られたのである。然らば天照大御神は如何なる神であつたかと言へば言ふ迄もなく女神であつた、光明を垂れ平和を愛するの女神であつた、素盞尊が亂暴をされた時には、天岩窟に隠れて争を避けら



るる程に平和を好む女神であつた。而も八百萬の神が其徳を慕つて何の疑もなく歸依仰望したのである。此の如き神話は何が故に我々の祖先に依つて信ぜられたのであるか、是れ則はち祖先の氣分に合致した爲である、若しも我々の祖先が平和を愛せずして戦争を好み、光明の徳を尊ばずして勇武の威を喜ぶ氣風であつたならば、何が故に天照大御神を棄て、素盞尊に從はなかつたのであるか、是れが則はち我々の祖先の氣風が平和を好むが爲である。勇武よりは明德を尙ぶ爲である。斯かる神話を承認し斯かる神話を道理に合ひたるものとして之を傳説し來つたる所に我々は慥かに我々の國民性の自然の流露を認むるのである。

又天孫降臨に先だちて出雲の大國主の神が歸順して何の戦争も無かつたと云ふのは、大義名分の前には何人も之に反抗する事が出来ぬと云ふ理想を

示すものであつて、同時に無名の戦をせぬと云ふ正義と平和の表現であると思ふ、若しも我々の祖先が殺伐で好戰的であつたならば、斯かる場合には戦争なくして歸順すると云ふ事を想像する事が出来ないのである。故に我々は斯かる神話を通じて考へて見る時に、我國民性は第一に平和を愛し大義名分を重んずるものであると思ふ、而して之が則はち高明なる我建國の精神を語るものであると云はねばならぬ。

第二に我々は三種の神器に關する傳説に就いて、我國民性を考へて見たいと思ふ、天孫の降臨に際して天照大御神は詔勅を賜はつて、「葦原の千五百秋の瑞穂の國は是れ吾子孫の王たるべき地なり、爾皇孫就いて治らせ、さきくませ、寶祚の隆へまさむこと天壤と窮りなかるべし」と曰はれた。更に五つの伴の緒の神々を配侍せしめた席上で、大神は八尺瓊の勾玉と八咫



の鏡と天叢雲劍の三種の神器を授けられた。そして特に寶鏡を授けらるゝに當つて「此の鏡は専ら我が御魂として我前を拜くが如く拜ぎ祭れ」と仰せられた、此三種の神器は國民の理想ともなり、治國の要諦ともなる所の高遠なる意義を有するものである。則ち勾玉の匂れるが如くに曲妙に御宇を知らしめし、又白銅の鏡の如くに明かに山川を看そなはし十握の劍を把りて天の下を平げ給へと云ふ意味である。北畠親房は神皇正統記に於て之を解説して「此三種の神器につきたる神勅はまさしく國を保ちますべき道なるべし、鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照すに是非善惡の姿現はれずと云ふ事なし、其姿に隨ひて感應するを徳とす、是れ正直の本源なり、玉は柔和善順を徳とす、慈悲の本源なり、劍は剛利決斷を徳とす、智慧の本源なり、此の三徳を合せ受けずしては天下の治まらむこと洵

に難かるべし、神勅明かにして詞約かに旨ひろし、中略、中にも鏡を本とし宗廟の正體と仰がれ給ふ、鏡は明を形とせり、心性明かなれば慈悲決斷は其中にあり、又まさしく御影を寫し給ひしかば深き御心を留め給ひけむかし」云々と記してある。則ち鏡は正直を意味し玉は慈悲を意味し劍は決斷を意味すと云ふのである。或は之を支那風に解釋して智仁勇の三徳の象徴であると云つてもよい。此三徳は治國の道ともなり、國民道德の標準ともなるのである。殊に鏡を以て第一位に置かれた事は、我國民道德の高明なる理想を語るものと云はねばならぬ、若し單に尙武を以て立國の要義とするならば劍を第一位に置くべき筈である、此點から考へても我國民性は正義を愛し平和を好むものであつて決して好戰國民にあらざる事を知るに足ると思ふ。



次に我神話に於ては、萬機公論に決すべしと云ふ理想が明瞭に表はれて居るのである。則ち大事件のある度毎に八百萬の神々が天の安の河原に神集ひに集ひ、神謀りに謀り給ひ、衆議に依つて事を決せられた。例せば天照大御神が天岩窟に入られた時にも、八百萬の神が天の安の河原に集まつて評議をして、思兼神の智謀によつて舞樂を奏したのである。又天孫降臨に先だち大國主神に歸順を説かしむる際にも、度々八百萬の神が評議して事を決したのである。則ち神代に於ては我々の祖先は凡て皆神である、神に上下の隔ては無い、總て平等の資格に於て評議に参加し獻策したのである。聖徳太子の憲法十七條中の第十七に「夫れ事は獨り斷むべからず、必ず衆と共に論ふべし、小事は是れ輕し、必ずしも衆とすべからず、唯大事を論ぜむに逮びては若し失あらむ事を疑ふ、故に衆と相辨ふる時は辭則

ち理を得む」と掲げてある事も、更に亦明治維新の五條の御誓文中にも「廣く會議を起し萬機公論に決すべし」と詔せたる事も凡て皆神代の理想に出で、居るのである。此の如く萬衆皆相融和して何の私心なく専横なく、全たく文字通りに萬機公論に決すると云ふ公明なる心事は、則ち我國民の萬年に亘りて規範とすべき教訓である、所謂君民同治の意義が此間に明かにされて居るのである。尙神話を通じて重大なる理想は、君幹臣枝の理想である、我祖先は第一に此地球を生んだのである、そして我々は天祖の直系を本家とし君とし天祖の傍系を分家とし臣として繁榮したのである。故に我々君臣の關係は征服されたのでは無い、繁榮して來たのである。切つても切れぬ血族の關係である。故に大義名分が餘りに明らかに定まつて居て、直系が皇位に即くと



云ふ事は太陽が東から出ると云ふが如くに自然であつて、疑問を超越して居るのである。茲に我々君臣間の親愛がある、茲に我々臣民の自尊心がある、天皇の尊嚴は我々自身の尊嚴である。我々と皇室とは一身である、我が天皇を奉戴するは身體が頭部を戴くが如くである、さぞ重たいであらうと見えるけれども少しも重たくは無、イヤ單に重たくないのみならず若し頭部が無くては一寸先は闇である、我々の神話は此の如き觀念を先天的に我々の胸中に植ゑたのである、故に我々臣民間は皇室以外は凡て平等である我々の社會的地位が貴賤貧富の差別があると云つても、均しく是れ高産靈神の子孫である、下等動物でもなければ上等動物でも無い凡て平等である、故に古代文化の未だ進まざる時代に於て、統治權と所有權の分界の立たない時は、普天の下率土の濱王の民にあらざるは無く、王の土にあ

らざるは無しと稱されて居た、今日の法律論ではさうは言へないであらう、併し我々の精神的感情から言へば矢張りさう言ひたい。同體一身であると考へて居る心持から言へば、頭の差圖通りに手足が動いたからと言つて、手足の尊嚴を傷けるものとは考へられない。頭に任せて置けば如何なる目に遭ふか不安でたまらないと云ふ考は、手足には起らないのである。我々は明かに皇室に對して此の如き感情を有して居る。之と同時に我々は皇室以外は凡て平等なりと考へるのである、此の如く神話より出發したる我々の感情が、常に我々國民の精神を支配して居るから、後世に至り族制政治の結果子代の民とか屯倉とかが出來て、豪族の私民私田が多くなつた時に、大化の新政を斷行して總て之を天皇に奉還せしめ、皇太子中大兄皇子を始め群臣が皆奏請して自己の所有の私民私田を獻上した。又明治維新の際に



も薩長土肥の四藩が卒先して版籍を奉還し三百諸侯が皆之に倣ふた、そして上奏して臣等の管理して居た土地は總て陛下の土地であるから返還致しますと申し上げたのである、此の如き感情と云ふものは全たく我國民獨特の感情であつて、外國人には想像も出来ない所である。そして我々日本人は大化の新政の時に於ける豪族の行動も、亦明治維新に於ける三百諸侯の行動も、皇室に對して爲すべき當然の事と考へられるのである。此理想此感情は總て皆神話に於ける君幹臣枝の感情から養成し來つたものであつて、君民間の親愛と臣民各自の間に於ける平等觀とが我々に此感情を齎らしたものである。故に外國に於ては到底階級闘争とか、革命的手段に訴へなければ成就し得ない社會改造でも、我日本では必要に應じ、平和的手段を以て之を解決し能ふ所の先例を有し確信を有するのである。

6

以上述べたるが如く、我建國の精神は第一に平和を好愛する高明なる心事を理想とし、第二に大義名分を正うする事、第三に萬機公論に決するの理想、第四に君民同治四民平等の理想、凡そ是等の理想は所謂之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らざるものであつて、我々は此精神を時代に適應して運用して行かなければならぬのである。唯一言附記したいのは建國の精神に關する事は、往々朝鮮臺灣等の新附の同胞に共鳴し難き點がある、之に對しては我建國の精神と歴代の事蹟は、外國人歸化人其他新附の民に對して、最も公明な無差別の態度を採つて居る、故に新附の同胞に於ても我々の感情を理解し、國家的共同生活を爲す上に於て、一時も早く同一の感情を抱く様に希望したのである、之を成就するの道は第一に内地人の態度、第二に新附同胞の心得方にあるのである。



第參章 國民的信仰

鶴の脚は長い、併し乍ら之を切つて短かくすれば鶴は必ず泣くであらう、鴨の脚は短かい、併し乍ら之に加へて長くしてやれば鴨は必ず哀しむであらう、何となれば左様な餘計な御世話をせられては却つて不便である、イヤ不便であるばかりでは無く却つて身を亡ぼすのである。我々が外國に對して何時でも判断を謬まるのは人種氣候人情風俗言語宗教を異にしたる者に對して我々自身の判断を以て之を判断せむとするからである。換言すれば鶴の心を以て鴨を判断し、又は鴨の心を以て鶴を判断せむとするからである。鶴の獨立自存は長き脚にある、鴨の獨立自存は短かき脚にある、之

を棄て、他を求むるは自ら滅ぼすものである、我々は此意味に於て常に國民的信仰の尊重すべきを思ふのである。

我日本の國民的信仰は何であるかと言へば皇室中心主義である、此信仰が無くなれば我帝國は滅ぶるのである、我々自身が滅ぶるのである。併し乍ら皇室中心主義に對する理解は其時代の精神に適應したる透徹せる理解であらねばならぬ、固陋ではいけない、盲目ではいけない、強制ではいけない、阿諛ではいけない、眞に自覺し眞に徹底し自己の自尊心と自己の尊嚴とを彌が上にも増さしむるものでなくてはならぬ。皇室は實に我々の國民精神を結合する唯一のものである、之を失ふ事は國家の破壊である、國民の滅亡である、身體の斬首である、而して之を尊重するは自己を尊重するものである、之が光榮あるは自己の光榮ある所以である、之が尊嚴神聖な



るは自己の尊嚴神聖なる所以である。此理解に透徹せるものは我建國の精神に透徹せるものである。然らば則ち斯かる感情が如何にして養成せらるゝか、斯かる信仰が如何にして體得し得らるゝか、是れ唯建國の精神を理解するにあるのみである。

夫の英國を見よ、英國人は盲目的にデモクラシーを信仰する、如何なる批難があつても如何なる困難があつても飽迄も其信仰を棄てない、そして盲目的に議會中心主義を固執する、如何なる善事も如何なる惡事も議會を通して行はれたものでなくてはならない、苟も議會を通して行はれたる事は女を男に爲す事以外は何事でも出來ると信じて居る。そして其凡てを自己の責任なりと承認して居る。此透徹せる自治心は實に尊敬すべきものである、然らば如何にして英國人か此の如き自治心を養成したか、之には何の

妙薬もなければ妙法もない、皆英國の歴史的發達に依るものである。決して一朝一夕に他國人の模倣する事の出來るものではない、國民的信仰と云ふものは事實である、歴史である、國民性である、決して理屈では無い、我皇室中心主義に對する信仰も亦英國の自治心の發達の如く其歴史と其國民性によるものであつて、決して理屈によつて製造されたものではない。最近に於ける英國政黨の消長を見ると、労働黨は過去數年間に長足の發達を爲し、一九一八年の總選舉に於ては六十名の代議士が當選したが一九二二年には一四二名となり、一九二三年には一九二名となつた、當時保守黨が二五八名で自由黨が一五六名で、矢張り保守黨が比較的多數であつたけれども自由黨も亦保守黨内閣に反對して居たから、反對黨の勢力が三四八名となる譯で内閣が辭職したのである。然るに聯立内閣を作らないで労働



黨の單獨内閣が組織されたのである。我々が考へると労働党内閣と言へば非常に過激なもの、様に思はれるが、英國は矢張り極めて實着穩健である。そして飽迄も議會主義を尊重し、直接行動を排斥して居るのは勿論である。然るに流石の英國でも最初の労働党内閣であるから世論が喧しかつた。其時に自由黨のアスキス氏が労働党内閣に對する賛成演説をした言葉に「世人は往々労働党内閣の成立を危険なりと考へるものがあるが決して心配には及ばない、曩に米國の獨立の際にも英國の破滅だと言つたものがある、又一八三二年の選舉權擴張の時にも英國の破滅だと言つたものがある、更に一八四六年の穀物條例廢止の時にも英國の破滅だと言つたものがある、尙グラツドストーンが遺產税を起した時にも英國の破滅だと言つたものがある、然るに英國は此の如き破滅の連續の中に發達し來つて居る。今日労働

党内閣が出来ても我英國の基礎は微動だもするものでない」と言つて居る。タイムス新聞の如きも當時「労働黨を暗殺すべからず」と論じて労働党内閣の成立に賛成した。此の如くにしてマクドナルド内閣は成立したのである。英國が議會主義に忠實なるは則ち英國の堅實なる所以である。然るに其後幾干もなくしてキヤンベル事件と云ふものが出来た、之はキヤンベルと云ふ男が軍隊煽動の文章を雑誌に書いた爲に、内亂教唆罪に問はれんとしたのを、労働黨員が揉み消し運動をしたので司法權蹂躪問題が議會の大問題となつて遂に解散となつた。然るに其總選舉に方つて更にジノウイエフ書翰事件が起つた。則ち露國の第三インターナショナルの總裁が英國の共產黨に武力革命煽動の手紙を送つたといふのである。其信僞は明確では無いが英國の輿論は此の如き過激の行動に兎もすれば好意を寄せんと



する労働黨の行動を批難し、遂に一九二四年十月の總選舉の結果は、労働黨は百五十名に減少し保守黨は四百名に餘る壓倒的大多數を以て勝利を得た。そして今日の保守黨内閣が出来たのである。我々は斯かる英國の近狀を見て英人が益々堅實で議會中心主義を確持して居る國民的信仰に對して敬意を表するものである、労働黨が多數の時には安んじて内閣を組織せしめた、而も此多數は單に反對黨中での比較多數であつたのである、而して労働黨が少數となつた爲に多數の保守黨が内閣を組織する、之に對して労働黨は最早文句の言ひ様が無い。

英國人は何故に露國の共產思想に共鳴しないかと云へば、それは極めて簡單明瞭である。英人はデモクラシーを信條として專制政治には反對である、然るに露國の共產政治は労働者の專制政治である、故にデモクラシーの精

神に合致しないと云ふのである。

次に米國の國民的信仰を考へて見るに、實質的に言へば個人主義であり、

形式的に言へば憲法中心主義であると思ふ。ゼームス、ブライズ氏は嘗て米國民主主義を説明してアメリカン、デモクラシーは自由と平等と同胞心であると説いた。之も米國人の氣分を説明し得たものであらう。併し乍ら商務卿ハーバート、フリーヴァー氏が説明する米國個人主義なるものが最もよく米國人の氣風を表はして居る様である。其所論は大要次の如くである。米國個人主義は歐洲の個人主義の如くに、社會階級に捉はれたるものでなく全たく自由の新天地に發達し米人の國民性に根柢を有し、經驗によつて産れたる確信の上に立つものである。米國個人主義の特性は第一に機會均等の精神である。歐洲の社會は從來の階級が存在して流動性を欠いて居る、



然るに米國は一切從來の拘束が無い。米國ではワシントンの如き大偉人に對しても世襲的勳爵を與へない、何となれば父祖の如き能力なき者、父祖の如き奉仕なき者に對して何等の特權を與ふべき理由が無いからである。米國にては何人と雖も自己の理智と品性と才能に相當したる社會的地位を得べき機會均等を保證されて居る。故に單に父祖の努力によりて無能力の子孫が、特殊の地位を得て他の有能者の自由の發達を妨害するが如き制度を許さない。此機會均等主義の結果として第一に自由放任主義を許さない、若し經濟的勢力の自由放任を許さば、大會社やトラスト等は獨占的に利益を壟斷して、個人の機會均等を得せしめない結果となるからである、政府は飽く迄も此種の專横なる勢力を牽制せねばならぬ。第二の結果は各個人の創意的創造的の活動を助長せしめ生産や發明に對する勤勉心を刺戟せし

むる事である、其必要上政府は決して經濟上の生産と分配とに干渉してはならぬ、此意義からして露國の共產思想の如きは絶対に米國の個人主義と相容れない。何となれば産業や商業の國有化と云ふ事は、一面に於て經濟的の專制政治であつて、個人の機會均等を認めないからである。又他面に於ては生産に對する勤勉心を抛たしめ、又發明創意等の努力を刺戟しないからである。故に米國に於ては若し茲に一の法律が制定せられむとするに當りては、必ず二ヶ條の質問を爲すのである。第一個條に曰く、此法律は機會均等を防護するや否や、米人は此質問に依つて專制的支配を禁止せむとするのである。第二個條に曰く、此法律は國民の創意性を支持するや否や、米人は此質問によつて社會主義に反對して個人主義を擁護せむとするのである。



米國個人主義の特性の一は機會均等であるが、其二是社會奉仕である。此の精神的靈動が個人主義の高尙なる半面である。此の如き高尙なる靈動を以て之を帝王とか僧侶とか聖賢者とか言ふ少數人の特有とせずして、凡ての各個人が皆此高尙なる靈動力の持主たる事を主張する所に、個人主義の崇高なる精神的努力が存在するのである。現在よりもより善き、より明るき、より廣き個人主義の發達を期待するには、奉仕の精神の發動に俟たなければならぬ。そして大戰後米國に於ては實に目覺ましき潮流を以て此奉仕的精神の發達せる事を認むる事が出来る。

以上はフウヴァー氏の米國個人主義の解説であつて、我々は米國先覺者の國民精神陶冶に對する努力に敬意を表するものである。而して米國は此個人主義に對する信仰を以て露國の共產思想を一蹴して居るのである。

尙我々が米國人の憲法に對する執着心を見ると、殆んど不可解に思はるゝ程である。米國人は一旦定めた憲法に對して之に手を觸るれば罰が當ると云ふ程に神聖視して居る。斯かる保守的氣分と云ふものは、米國人として極めて不思議に思はるゝのである。一例を舉ぐれば、米國の上院の選舉が從來州會の間接選舉であつた爲に財閥が專横で民意を阻止するから、之を民選にして直接選舉に改むると云ふ憲法修正案が一八二六年に議會に提出された。爾來約九十年の久しきに亘りて決議案の提出さるゝ事四十回以上に達し最近一八九三年以後下院に於て、之を可決したる事六回に及ぶも上院は常に之を否決し去つたのである。而して一九一三年に至り、漸やく其目的を達して直接選舉となつたのである。民主政治を以て徹底せる米國人が、民意を代表する下院の決議を無視する上院の行動に對し、斯く迄も隱



忍し來りたる一事は、如何に米國人が其半面に於て保守的氣分に富み、憲法尊重の精神を有するかを見る事が出来る。此の如く憲法を神聖視して如何なる場合に於ても、之に固執せむとする憲法中心主義は、是れ實に新進氣鋭の青年國たる米國の基礎である。而して世界の移民の集團地として四十個國の人種の共進會の觀ある米國を團結せしむるの基礎である。米國人は此の如く一方に於て個人主義を尊重して共產思想を排斥し、更に一方に於て憲法を神聖視して國家の組織を安定せしむる國民性を有して居る爲、此國民的信仰あつて米國は始めて堅實なるを得るのである。

#### 第四章 外國の教訓

我々の心竊かに感謝に堪えざるは、我隣國の中華民國に於て又は露西亞に於て若くは伊太利其他に於て、幾多の生命財産を犠牲とし、種々なる形式に於て國家社會の破壊演習を行ひ、之によりて貴重なる教訓を我々に提供し、生きたる研究資料を我々の眼前に展覽せしむる事である。

##### 第一 中華民國

中華民國に於て我々は如何なる事を學ぶべきか、蓋し公平に觀察して支那人は我々よりも個人としては聰明である、我々よりも體格に於て優秀である、生活上に於ても我々より安價に衣食し艱苦欠乏に堪ふるの素質を有し



て居る、其歴史的文化に於ても嘗て久しく我々の先進國として師事した所である、其面積に於ても其人口に於ても更に其天然の富源に於ても遠く我國の及ばざる所である。斯かる優越せる民族と富源を有し乍ら何故に今日國威振はず戰亂相次ぎ殆んど列強の爭奪分配の目的物たるが如き状態にあるのであるか、其理由は極めて明白である。則ち支那人は個人としては極めて優秀であるけれども國民としては極めて劣等である。私人としては極めて卓越して居るけれども、公人としては極めて我欲である。支那では昔から「文臣錢を愛し武臣命を惜む」と云ふ言葉があつて、文臣は率ぬ官吏を以て一種の營利事業と考へ、苟も一旦高官に在りたる者は必ず巨額の財産を蓄積するは當然の結果となつて居る。又武臣の多くは命を惜んで容易に發砲もしなければ容易に突撃もしない、表裏反覆殆んど敵味方の區別

を判じ難い。それ故に常に反間苦肉の計が行はれ一旦身上の不安を感ずれば上官に背き部下を棄て租界に逃れて外國の保護の下に、其身體と財産とを完うせむと努むるのである。而して軍隊と國民との間に何等意思の聯絡なく國民の戰爭に對する考は我々の選舉運動に對するよりも尙冷淡である。何人が自己の主權者となるも全たく馬耳東風の如くであつて、苟も苛斂誅求を爲さざる限りは何等我に關係なしと云ふが如き態度である。中華民國の今日の如き現狀は我々より見て極めて悲惨なりと考へらるゝけどれも、支那人は少しも自ら悲惨なりと考へて居らないのである。井を掘つて水を飲み田を耕して食ふ、帝力何ぞ我にあらむ、我は唯自ら獨立して生活して居るのであると思つて居る、此の如き國民性は到底我々日本人の理解し能はざる所である。又此の如き國情に於ても平然として居る事は到底我々日



本人の忍び能はざる所である、故に我々が中華民國の現狀により學ぶ所の教訓は二つある、第一は自己を先にして國家を後にする國民は如何なる境遇に立ち至るかと云ふ事である。第二は公人としての士道の頹廢せる政治は如何なる情態を呈するか、又國民が一切政治道德に無關心なる結果は如何なるものであるか、と云ふ事である。

## 第二 露 國

次に露西亞の現狀に就て我々は如何なる事を學ぶべきか、試みに露國の帝政時代と今日の勞農政府の時代とを對照して考へるならば、善にも惡にも共に極端より極端に飛び移り居る事を見出すのである。第一に帝政時代に於ては君主專制であつて壓制政治が行はれ、貴族や僧侶や富豪や大地主が跋扈して無産階級は全たく奴隸の如き境遇であつた、それ故に今回は復讐

的に全たく其反對の道を歩み、勞農政府に於ては勞働者の專制政治であつて、貴族や僧侶や富豪や大地主を奴隸の境遇に置かむとするのである。則ち勞働者以外の商人も僧侶も雇主も一切政治上社會上の資格を剝奪して投票權も與へなければ生活上の特權も與へない、元來露國では勞働者は國家から娛樂とか旅行とか醫藥とか保険とか子供の教育とか住宅とか云ふ事を供給され保證されて居るけれども、商人や僧侶や雇主の如き者は教育も醫藥も自辨である、政府の要求があれば一ヶ月間に自己の邸宅を勞働者に貸與せねばならぬ、又芝居の入場料も勞働者の十倍を支拂はねばならぬ、そして如何に勤勉に貯蓄しても遺産は千磅即ち一萬圓以上は沒收せられる、其手段は實に徹底的に帝政時代に反對である、第二に「宗教は阿片なり」と稱して一切の宗教を有害無益なりとして之を嚴禁して居る、そして



之に反抗せる百名の僧正と千名の牧師は死刑に處せられ、寺院は國家の所有に歸し僧侶は之に賃金を支拂ひ、又僧侶は投票權もなく一切の國民の特權もない、尙一九二一年に於て教會の財産は凡て差押へられ沒收されて仕舞つた、勞農政府は何が故に此の如く宗教を敵視して、之に壓迫を加へるのであるかと云へば、之れ亦極端から極端に飛び移つた反動である。元來帝政時代の露國の宗教は政教一致の舊教であつて教會の首腦者は皇帝である、僧侶は國家の保護によつて莫大の收入があつた代りに皇帝に服従して少しの自由をも得なかつた、そして僧侶は常に皇帝を背景として專横を極めた、例せば一八八一年歴山三世即位して宗教院長ボビエドノスチエフを信頼して猶太人に對し宗教的壓迫を加へ、更に新教スツンジスト派に對して極端なる迫害を爲した、此の如く皇帝を背景とする政教一致の宗教を

以て宗教の自由を奪ひたる宗教的積惡に對する憎惡は、遂に革命論者をして宗教は阿片なりと絶叫せしむるに至つた動機である。第三に勞農政府の信條として「働かざる者は食ふべからず」と言ふ事がある、元來ソヴィエツト制度の根本原理は共產主義を實行し多數の勞働者に最も多くの利益を與へむ事を目的として、之に都合よき國家と社會を造らむとする爲に凡ての私有財産權を剝奪するものであるから、勞働者以外は之を保護する必要は無い、故に働かざる者は食ふべからずと云ふのである。然るに斯かる道徳的の事項を法律的強行事とし之を憲法に規定するのみならず、凡ての法制を此意義によつて作るに至つた所以は如何と云へば是れ亦帝政時代の反動であつて、貴族や僧侶や富豪や大地主が働かずして食つて居る、否働かざる者程最も贅澤をして居る、之に對する反動として勞働者以外の者には



投票權も特權も認めないと云ふのである。然るに此信條は所謂有産階級に對する一大痛棒である事は勿論であるが、露國一般の國民即ち無産階級に對しても可成りに熱いお灸である。元來スラブ人種は多情多感である、然るに土地は空漠として眼を樂ましむるものなく、氣候は寒烈であつて半年は積雪の中に蟄居せなければならぬ。加ふるに從來政府や教會の壓制を受けて政治上の自由も信教上の自由も無い、それ故に教育ある者は憂鬱悲觀破壊空想に耽つて虚無黨とか共產主義とか云ふものを考へる、又無教育者は不活潑で懶惰で閑居して不善を爲しウオツカと云ふ強き酒を飲んで遊んで居る、露國文豪ゴンチャロフの小説中の人物にオブモーロフと云ふ者がある。此者は家柄も財産も戀も棄て、一生涯寢臺を下らずに暮らしたと云ふ男である。故に斯かる惰眠主義を名づけてオブモーロフ主義と云ふ。

露國の諺に「職業を棄てるな、併し仕事はするな」と云ふ事がある、露國人には此の如き懶惰の氣風がある、故に實際に於て自治自由の政治よりも専制政治が適當して居る、唯帝王の名に於て専制するか、共產黨代表者の名に於て専制するか、の差あるのみである。随つて働かざる者は食ふべからずと云ふ事は露國人にとつては最上の教訓である、痛棒である。折檻である、唯共產思想の如く私有財産を認めざる制度の下に於て、一萬圓以上の遺産は沒收さるゝ場合に果して勞働獎勵が實行さるべきかは蓋し大なる疑問である。寧ろ反對の結果が生ずるものと思はれない。第四に勞農政府の官吏は極めて勤勉である、そして概して清廉である、加ふるに其監督は極めて嚴重である、内閣大臣と雖も月俸は僅に二十磅(二百圓)に過ぎない、そして中々に勤勉であつて日夜精勵する、故に一切の行政費は一億



九千萬ルーブルに過ぎないで帝政時代の半額に達せない、又官吏は多く共產黨員に限られて居るから其監督は中々に嚴重であつて、苟も不正行爲が存在するならば極刑を以て糺弾されるのである。恐らくソヴィエツト役員の能率と廉直とは世界に於て比類が少くないであらうと稱せられて居る。何故に斯くの如く官吏が廉直勤勉であるかと云ふに、是れ亦極端に對する極端であつて帝政時代には官吏の腐敗實に其極に達して居たのである。文豪ゴーゴリの小説レピゾールに現はれたる検閲官の喜劇の如き、又はアルツイバーセフの小説「恐怖」に現はれたる判官警官醫者の共謀せる悪事の如き、凡て官吏の腐敗の極端なる事を證するものである、露國革命は此腐敗を矯正せんとしたのも其一原因である。以上述べたるが如く露國の革命は、徹頭徹尾帝政時代の弊害に對する極端

なる反動である。善にも惡にも絶對的の反動行爲である、此歴史的事實を理解しなくては何故に此の如き極端なる革命が生れ出でたるかを理解する事が出来ない。若しも此の如き歴史なき國に於て露國の如き革命を爲さんとしても其國民は到底此の如き反動氣分を起し得ないのである、何となれば是れ唯露國に於てのみ起り得べき事實であつて、他國には其必要が無いからである。元來露國の社會は富豪と無産者とあつて中産階級が無い、又露國人の性格は常に極端から極端に走つて中庸と云ふものが無い。或旅行者が嘗て露國の一小學校を參觀した時に、生徒の一人が林檎を盗んだと云ふ事件があつて之を處罰する爲に學校會議が開かれた、然るに學校會議は恰も小なる一ソヴィエツト共和國の如きもので、生徒も教員も同一資格で多數決によつて決定する、そこで生徒の一人が退校處分を主張したので他



の生徒は忽ち雷同して退校と決定した。然るに一年少教師が熱心に其處分の慘酷に過ぐる事を論じた。すると無邪氣なる生徒は忽ち其教師の熱誠に動かされて直ちに前決議を取消して無罪と決定した。則ち露國人の氣風は極端から極端に走るのであつて退校にあらざれば無罪である。停學とか謹慎とか云ふ中間の處分は無い、露國人の性格は之を譬へば柱時計の振子の如きものであつて右へ二寸動けば必ず左へ二寸動くので、中間に停ると云ふ事は無い、其性格が子供の時から表はれて居ると其旅行者は批評して居る、味ふべき話である。

勞農露國の現狀如何と云ふ事は興味ある參考資料である。我々は此隣國の現狀に對して餘り詳細なる事柄を知らなくともよいが、唯極めて常識的に其大體を知つて置く事が最も必要である。

第一、其國名に就て考へて見ると、今日世界地圖に於て露國と云ふ國家は無いのである、然らば通常我々が露國と云つて居る國は何と云ふ國名であるかと云へば「社會主義ソヴィエト共和國聯盟 Union of Socialist Soviet Republics」と云ふ随分長い名前である、丸で法性寺入道前關白太政大臣と云つた様な名前である、そして其聯盟に如何なるものが含まれて居るかと云へば、一、露西亞社會主義聯合ソヴィエト共和國、二、ウクライナ社會主義ソヴィエト共和國、三、コーカサス社會主義ソヴィエト聯合共和國、四、白露西亞社會主義ソヴィエト共和國の四つに別れて居て其一是更に十八の共和國に分れ其三是更に三つの共和國に別れて居ると云ふ極めて複雑なる國家組織になつて居る、更に最近又新しい共和國が加はる事となつた、故に我々が通常露西亞と條約を結ぶと云ふのは則ち社會主



義ソヴィエト共和國聯盟と條約を結ぶのである、其名前には露西亞と云ふ地理的名稱は存在しない、何故に地理的名稱を加へないかと云ふに勞農政府の目的は全世界に革命を宣傳し、之を社會主義ソヴィエト共和國とし、英國支部日本支部と云つた様なものを作らうと云ふのであるから、モスクワは其本部として全世界を統轄せんとするのである。則ち全世界が社會主義ソヴィエト共和國聯盟となるのが理想であるから、地名を附するの必要が無いと云ふ見識である。其國名の起源から考へて見ても隨分亂暴な主義を抱いて居るものと言はねばならぬ。

第二、露國は共產主義を實行するが爲に無産者獨裁政治を夢み、土地も礦業も運送業も工業も銀行も外國貿易も新聞も、凡て之を國有又は國營とし、労働者には生活に必要な最低賃銀を與へ、衣食の必需品を買ひ求めしめ

其他の人間の要求物たる娛樂、旅行、醫藥、休養、保險、教育、住宅、等は特權として國家より支給すると云ふ社會組織である。此の如き社會組織が果して人間の實生活に適當して居るであらうか、我々は之を事實に就て考へて見たいと思ふ。先づ我々は常識より考へて見て人間の賢愚智鈍巧拙を區別せず、凡ての者に一定の生活必需賃金を與へ其他は凡て之を平等に官給し、死後は遺産として一萬圓以上は之を認めず總て之を沒收すると云ふ制度の下に於ては、何人と雖も勉強するが馬鹿くしい譯である。それよりは遊んで居て食ふ方がよい、少なくとも申譯の出来る程度にお茶を濁して勞働すればよい、眞面目に一生懸命となるのはつまらないと思ふのは人情の自然である、殊に農業の如き土地の生産物たる穀物を凡て國家に沒收し唯農民の食料に必要な丈は之を與ふと云ふが如き制度に於ては、必ずや



農産物の減收を來すに相違ないと考へられる。果せる哉露國が共產主義となつてから農産物が激減した、則ち一九一〇年には耕作地面が戦前の六割に減少し一九二一年には五割四分に迄減少した。又其收穫も戦前の四十億ブード(約百六十億貫)が二十五億ブードに減少した、それが爲に大飢饉を起して慘憺たる光景を呈した。茲に於てか大に驚いて一九二二年から新經濟政策を實行して收穫の沒收を廢止し、土地國有を事實的に廢止して個人所有を認め六ヶ年を経過せざる期間で之を賃貸する事も出来れば又労働者を雇ふて之を耕作する事をも認めたから、一九二三年からは再び農産物の收穫を激増するに至つた。又各種の工業を全部國營とし一切の民營を認めない場合は如何なる結果を生ずるであらうか、必ずや各人の競争心を拋棄せしめ、所謂お役所仕事となるの結果生産費が増加するに相違ないと

想像されるが、案の如く生産費は戦前に比して石炭は三倍綿糸は二倍三分綿布も亦二倍三分餘となつた、随つて各種工業製品は全部騰貴して其價格は戦前の二倍又は三倍となつて來た、そして一九二〇年には石炭の生産は戦前の二割七分食鹽は三割鑛石が二割五分に減少し、國內全産業の生産額は戦前の六十億ルーブルより僅かに十億ルーブルとなつて仕舞つた。茲に於て工業にも亦新經濟政策の必要を感じ、五名以上の労働者を有する工場は一九二〇年の法令で凡て國營であつたのを、翌一九二一年には二十名迄の労働者使用を個人工場に許す事とし、更に一九二三年には大規模の企業にも民有を許す事に改めた。此の如く漸次共產主義の非を改めて所謂資本主義に退却するに隨ひ、國內の生産は漸次恢復し一九二〇年には戦前の生産に比し僅かに一割四分半なりしものが毎年増加して一割五分、二割一分



半、三割二分半、四割二分となり則はち最近には約半額迄に恢復し來つた譯である。是等の數字は最も露國に好意を有する、英國勞働組合派遣員の調査報告に據つたものであるから確かであらうと思はれる。又我々が常識から考へて見ても、小學校の兒童の所罰は生徒會議で議決するならば、必ずや生徒の出席歩合が悪くなるであらうと考へらるゝが、案の如く共產黨機關新聞ブラウダ紙の報ずる所によりても、モスクワ市の各學校で登校生徒は全員の二割五分で其餘の七割五分が欠席であると傳へられて居る。次に所謂無産者獨裁政治の真相如何と云ふ事を常識的に判斷して見ると、今や露國の政治は共產黨員によつて支配されて居る、然るに其共產黨員の數は非常に少數である、是も英國勞働組合派遣員の報告に依つて見ると一九一七年には二十三萬六千人であつて其後毎年増減があつて十一萬五千五百人、

二十八萬五百人、四十三萬一千四百人、五十八萬五千六百人、四十萬一千三百人、三十七萬三千人、三十五萬人と云ふ數字を示し則はち一九二四年は三十五萬人である、最多數の時でも六十萬人には足らない、今之を露國の總人口一億三千三百萬人に比較すると三十五萬人は僅かに三百八十分の一に過ぎないのである、そして他國の政黨の如くに黨員を増加する事を爲さずして却つて之を減少せむとし毎年必ず試験を行つて之を淘汰し之を名づけて「掃除する」と云つて居る、此の如くして精銳にして信念強き黨員を作り之を率ゐて全國民を支配するのである、隨つて幹部の權力は極めて強大であつて一切少數派を作る事を許さない、若し少數派を作らむとすれば反逆者と認められる、それ故にレーニンの死後はスターリン、ジノヴィエフ、カーメネフ等の寡頭政治が行はれて居るのである、故に露國政治の



真相は無産者一億三千萬人の政治ではなくして共産黨員三十五萬人の政治である、否三十五萬人の政治では無くして最高幹部三人乃至五人の政治である、換言すれば無産者の政治にあらずして無産者に對する政治である云はれて居る、則ち專制政治である事は帝政時代と何等異なる所が無いけれども、今日の如く共産主義を抛ちて資本主義に還原されたる上は多數の農民は矢張り帝政時代よりは幸福であるであらう、レーニンは偉人である、彼は共産主義を高唱して露國帝政政治を革命し既に權力を自己の手中に收めたる後には直ちに共産主義を棄て新經濟政策の名に依りて實際に適合したる政治を行つて居る、是れ恰も日本の明治維新に於て尊王攘夷の旗印を以て幕府を倒し、既に幕府を倒したる以上は誰一人として攘夷を叫ぶものも無く何時の間にか開國進取論者となり世間でも之を忘れて尤めないのと

同一である、次に勞農政治の實際を知るべき參考資料として所謂非幹部派が並べて居る不平は、一、官吏選舉の自由は空文であつて幹部專制任命である、二、幹部の方針に反する言論は絶對壓迫を受け發言權の自由が無い、三、黨内の官僚化、四、幹部の贅澤（之は大臣の月俸は二百圓でも必要費の官費供給が莫大なりと云ふ事）五、勞働者の生活状態は少しも改善せられず、六、勞銀を引上げよ平均勞銀は戦前の六割に過ぎず、又勞銀支拂を延滞すな、七、情實緣故に依る處置が多い、八、ネツプマン（新經濟政策に依る成金）と國營機關の官吏との間の惡事を監督せよ、九、共産黨員の數を増加すべし、十、黨内の意見の相違に依りて分派を公認せよ、其他種々の不平があると言はれて居る、共産黨員以外の者の中には「共産黨が勞働者の味方であつたのは一九一七年十月の最初の革命迄であつた」と痛罵



して居る者もあるが非幹部派の共産黨員は「我々は共産の主義に反対では無い、唯幹部の方針に反対である」と云つて居る。

以上述べたる所は露國の現状に對する我々の常識的判断であるが外國の事情と云ふものはお互に理解し難いものである。殊に外國人の氣風とか好尚とか云ふものは中々に了解し難い、故に露國人が自ら満足して居る事を外國から心配したり世話を焼く必要は無い。之と同時に露國も亦我々に對して餘計な世話を焼く事は止めて貰ひたい、殊に世界の各國に革命を起さしめて共産國の一部とするなどは眞に餘計なお世話である、唯我々は今日露國と國交を恢復したのであるから我々も亦大に心得ふべき事がある、則ち日本が赤化を恐るゝのは猶露國が白化を恐るゝが如きである、露國が多

之を白化する事は國家の反逆であると言はねばならぬ、故に飽く迄も露國の國情を尊重して露國の内政に關する限り之を直接にも間接にも妨害せない様に心懸けなければならぬ、此理解が無ければ互に國交を害するの虞が生ずるのである。

### 第三 伊太利

露國の革命に次で我々の最も興味を牽くものは伊太利の現状である、首相ムツソリーニが黒シャツ組のフワシスト黨を背景として獨裁政治を行ふのは恰もレーニンが第三インターナショナルを率ゐて獨裁政治を行ふたと類似して居る、唯名義はレーニンは共産主義の實行者として起ちムツソリーニは共産主義の撲滅者として立つて居るのである、そして政治の實質はレーニンは極左から「廻れ右前へ進め」と號令しムツソリーニは極右から廻



れ右前へ進んで居るから結局相去ること遠からずと云ふ地點に來るのであらう、併し何と云つても伊太利は形式的に露西亞の絶對反對の道を歩んで居るのである、露國の革命にも歴史的の理由がある如く伊太利の獨裁政治にも亦伊太利特有の事情がある、則ち伊太利の國民は建國の當初から大伊太利主義を夢みて居たので大戦争の當初には獨塊伊三國同盟を棄て、中立の地位に立ち遂に一九一五年に聯合側に參加して奮戦した、然るに戦後英佛などの大なる收穫に對して伊太利はフューメさへも領土とする事が出來ないと云ふので大に憤慨し詩人ダヌンチオが義勇兵を率ゐて之を占領すると云ふ伊太利獨特の演劇的活動が出來た、そして戦争には勝つたが其結果は却つて悲惨で租税は戦前の五倍に達し物價は二倍三倍となり生活難の聲が喧しくなつたので熱狂的で感情に走り易い國民は遂に露國の赤化宣傳

に最も好都合の國なりと見込を付けられ伊國共產黨は之に氣脈を通じて盛んに同盟罷業を煽動し遂に北伊太利では工場を占領して之を労働者の共同管理とするに至つた、此無政府状態が遂に全國を風靡する勢であつたが一般國民は社會革命でもあれば生活難を免れるであらうと期待して居た、然るに事實は之と正反對で同盟罷業の結果工場を占領しても産業が益々不振に赴くばかりで生活難は愈々急迫を告げて來た、茲に於てか國民は之を赤化の害禍なりと感ずるに至つたが共產黨が赤衛團と稱する武力を有して居るので之に對抗するにも亦武力を要するのである、此時に方つて共產黨の横暴を打破するが爲に奮起したのがフアシスト黨であつて其首領がムツソリーニである、フアシスト黨は黒シャツを着て棍棒を以て敵を叩き付けると云ふ壯士の團體である、そしてムツソリーニは元來社會黨機關新聞の



主筆であつたが參戰を力説して除名せられ一變して愛國主義を高唱し其熱血と奮闘を以てフアシストを率ゐ以て非國家主義の社會黨を打破せむとしたのである。

一九二二年八月社會黨が鐵道電車其他の工業のストライキを行ふた時に政府は之を如何ともする事が出来ない、フアシストは奮起して之に對抗し同盟罷業者よ、政府は汝等を許すとも吾人は斷じて之を許さず」と唱へ例の棍棒を以て對手を撲り付けて之を鎮壓し同年十月遂に羅馬に進軍した、伊太利内閣は一月に交送し七月にも交送したが遂に十月に至り三たび交送してムツソリーニが首相となつたのである、此の如くムツソリーニは共產主義の社會黨を撲滅する事を目的とし労働者に對する組織攻撃を爲したのであるが一旦政府の當局者となるや俄然態度を一變して労働者に對する暴行

を中止した、其行動は全たく露國と正反對であるが當局者となつて態度を改めたる點は全く同一である、其意見に依ると露國は無産者獨裁政治を行つて居るが伊太利では其社會状態が露國の如くに有産者と無産者との二つの階級に區別されて居らぬ、即ち小地主小工業者が澤山であつて中産階級が多い、地主であつて自作農が澤山ある、故に無産者の限界が立たぬ、元來労働組合を作つて資本家に對抗し階級闘争を爲すと云ふが間違つて居る、是では共倒れである、故に労働組合は生産的活動の總合で無くてはならぬ、即ち「國民労働組合」と云ふものが必要である、組合は國民全體の利益を圖るべきであつて労働者だけの利益を圖る事がよくないと主張して居る、又露國の如き産業上の國家萬能主義を排斥し國家が直接に各種の産業を經營する事は大間違である、國營は却つて産業を衰退せしめる、國



家の職務は唯「監督」の一語である、直接生産に當る事は失敗であると云つて居る、其主張と行動は正しく露國と正反對である、元來ファシストは一種の精神運動であつて其憲法としては第一祖國第二義務第三規律と云ふ事を目標とし國民には義務ありて權利なし、政治には實行ありて議論なし、と云ふ主張である、故に自由には反對である、民衆には反對である、政見には食傷した、何事も國家本位で義務本位で労働本位で唯實行すればよいのである、議論はいらぬ、最も多く労働する程人間の尊嚴があり、幸福があり、誇りがあるのである、之を八時間労働など唱へて労働を少なくするは人間の義務を怠るものである、パンと金錢以外に理想なき憐れむべき者であると云つて居る、ムツソリーニは内閣組織後僅かに二週間の後に議會に出席して演説して曰く「余は形式の爲に諸君に敬意を表す、然れど

も諸君より何等特別の好意を求むるの意なし」彼は此の如き大膽なる言辭を放ち選舉法を改正して全國を一選舉區とし比較的多數を得たる政黨に議員の三分の二を與へ第二黨以下には三分の一を與ふ事とした、故にファシスト黨は僅かの比較多數の場合でも議員は三分の二の絶對多數となる譯である、彼は此の如くして絶對多數を持して居る、彼の財政改革策は頗る痛快なるものであつて最も現實主義のものである、第一、最大限の私營方針を執つて居る、則ち國營主義は左派に屬する煽動家の歡迎する所である、けれども之は結局國民の利益と産業の發展を害するものであると言ひ、鐵道電話等も私營に移す方針を執り政府專賣事業もマッチや鹽の專賣を廢止し生命保險も之を民營に移す方針を實行した、第二、資本擁護の方針を執つて居る、則ち資本に迫害を加ふるが如き財政政策は惡政策である、個人の



經濟活動を促すは貯蓄心にあるのだ、資本に課税せずして消費に課税するが良法である、若し個人の貯蓄心を失はしめ資本の蓄積を妨げたならば、産業が衰退して労働者も亦結局不幸を見るのである、故に政府は直接税よりも間接税を取る考であると宣言した、大藏大臣ステファニは曰く我々は伊太利を「貯蓄と云ふ樂園」にする。又、「資本のオエシス」にする、則ち世界は資本主義に對しては砂漠の如く荒涼で何でも資本に對して重税を課して居るが、伊太利は資本を歓迎して便宜と特典を與ふる砂漠中の綠地とするのだと云つて居る、又財産相續税や財産遺贈税を全廢又は半減してひたすらに貯蓄獎勵資本獎勵産業獎勵をして居る、第三に政費節減を行ひ、官吏に對して責任を重んじ全力を國家に捧げて奉仕の精神を作興せんとして居る、第四に軍縮に反對し寧ろ之を増加せむとして居る、ムツソリーニ曰く

「衰亡に赴くデモクラシーは常に軍縮を目的とするものだ」國際關係の現狀は軍備擴張を必要とするに至らむとして居ると公言した、第五に國民的課税主義を執つた、則ち國民は苟しくも收入ある限り負擔に任ずべきものであると言ひて勞銀にも課税した、又脱税監督吏を置いて「諸君は宜しく國家の眼玉となつて働くべし」と命じた、以上各種の財政改革を斷行した爲に伊國の經濟狀態が漸次恢復し九二一年の豫算には百七十億リレの欠損があつたが一九二四年には七億リレに迄減少するに至つた。

ムツソリーニの將來は如何、是れ大なる謎である、或者は之に反對して其選舉干渉を批難し言論壓迫を攻撃し此の如き獨裁政治は時代の逆行なりと言ひ、「歐州デモクラシー政治を崩壊せしむる一里塚」であると罵つて居る、併し乍ら伊國議會では尙其勢力が強大であつて昨年三月首相が病後初めて



議會に臨んだ時には熱狂的の拍手を受け下院議長は「下院の首相に對する感情は國を愛する伊太利全國民の感情である、伊太利の偉大と光榮の爲にムツソリーニは神聖である」と迄讚美した、之を以て見ても尙其勢力は隆たるものである、彼の強點としては武装されたる國民兵ある事と國王の後援及び羅馬法王の好意である、彼の弱點は國中有數の政治家の反對、新聞の反對、秘密結社の反對等である、而して我々の最も疑問とする所は露國ではレーニン死すとも勞農政府は死せずと云へる、けれども伊太利ではムツソリーニが死せば之に代るものが無いと考へらるゝ點である。

#### 第四 佛蘭西

次に佛國の現状を見るに大戦争の結果漸やく勝利を得たるには相違なきも國土は荒廢に歸し壯丁は死傷五百萬人に及び負債は三千億フランに達し、

加ふるに獨逸の復仇に對する警戒を爲すにあらざば一日も安眠するを得ず、然るにベルサイユ平和條約の履行に就ては英米共に頼むに足らず、殊に英國は大戦前に最も獨逸を怖れたるに、今や獨逸の海軍は全く勢力を失ひ、商船は多く英國の手に歸し殖民地も亦多く英國の物となり、海外貿易市場も亦多く英國人に歸し最早英國としては獨逸は恐るゝに足らず、獨逸の隆盛なる間は佛國に好意を表したるも今や佛國は何等自己に必要なし、故に英國としては傳來の方針たる大陸に於ける第二の強國を助けて第一の強國を敵とする主義に基き内心に於ては獨逸を助けて佛國を敵とする如き氣配を示すに至つた、今日佛國が獨逸に對して一步も假借せず極力之を壓迫するに努むる苦心は最も同情すべきものがある、フオシユ將軍曰く「佛國の安全は唯吾人の力によりて生ずるのみである、實に佛國の安全は有力



なる軍隊の力とライン河とより来る、則はち今後獨逸と戦争する場合は國外に於て戦はざるべからずと云ふのである、之が爲に其貧弱なる財政より六十五萬の現役兵と三千八百臺の飛行機を有し獨力を以て永久に獨逸を壓せむとするの意氣を示して居る。最近調印されたロカルノ條約により英佛獨白の四國が互に國境に關する保障を爲すに至つたから多少の安心を得た譯であるが、併し之が爲に佛國は果して幾干の兵備を縮少するを得べきかは興味ある問題である。又内政に於ては佛國民の大多數を有する農民は極めて堅實で勤勉であるから社會主義を排斥し熱烈なる國民主義を有し共產黨の如きは殆んど撲滅されて居る。

#### 第五 獨逸

次に獨逸の現状を見るに戦役の結果六百六十億圓の償金を課せられ、佛兵

はルール地方を占領して居り、現役兵は十萬に制限せられ、空軍は全たく禁止せられ今や國民は極力復興に努力して居る、元來獨逸人は實際的國民で規律を重んじ組織を尊ぶ氣風であるから共產思想などは發達しない、共和政治の如きも果して永久に彼等の國民性に適するか否やは疑問とされて居る、近時ヒンデンブルク元帥が大統領に當選せるが如きは最も注目すべき事である、獨逸も革命後一時産業の國有化を實行して見たが全部失敗に歸して之を廢止して仕舞つた、ブラウン博士曰く「獨逸の社會主義は今や空論家の手を離れて實際的の社會改良主義となつて居る、階級闘争など云ふ事は有り得べからざる原理である、唯一時は資本家攻撃の手段として唱へたが今日では必要が無くなつた」又ブレレンタノ教授の如きも久しく八時間労働主張者であつたが一九二四年プラグに開かれた社會政策國際會



議に於て獨逸委員としてし之に反對して曰く「八時間制度は主義としては反對せぬが、獨逸の現狀では不可能であるから除外例を求めたい」と

第五章 模倣は自殺なり

獨逸の哲學者カントは嘗て模倣は自殺なりと云つた、之を日本の諺にすれば「鵜の眞似する烏水に溺る」と云ふ事である、支那の諺には「邯鄲に歩を學ぶ」と云ふ事がある、之は或る田舎者が邯鄲と云ふ都に來て見ると都の人の歩き振が優美でよいから之を眞似して見た、併し如何程稽古しても出來ない、止むを得ずして故國に歸らむとしたが都の歩行振を稽古して居る内に何時しか自分の歩行き方を忘れて仕舞つた、それで遂に腹匍をして國へ歸つたと云ふ話である。佛國巴里の交通整理巡査が倫敦へ見學に來た、倫敦の交通巡査が手を舉げると、譯もなく通行人が足を止めて馬車も自動



車も停止する、それ故英國では巡查の腕は法律なりと云はれて居る、然るに巴里に歸つて来て腕を擧げて見たが、巴里の市民が少しも停止しないから折角の稽古も駄目であつた、と云ふ事である。素養も訓練も無くて唯外形ばかりを眞似て見ても役に立つものではない、何事も丸呑にしては駄目である、よく咀嚼しよく消化して自分のものとなさなければならぬ。

露西亞の共産思想も其國の特別の事情から産み出されたものである、今日世界各國一として露國の如き勞農政府を組織する所は無い、殊に年月を経るに従つて露國も實行上不可なる點を漸次緩和して追々と他の資本主義國と相去る遠からざる様になつて來て居る。唯我々の見逃してはならぬ事は共産思想は之を行ふ事は出來ないけれども、其精神を消化して其國民性に適する限り之を考慮すると云ふ寛大なる餘裕を持つ必要がある。佛國革命

の當時の思想たる自由平等の考は、縱令佛國の如き革命を起すに至らずとするも、各國の政治の實際に大なる影響を與へた事は之を否認する事が出來ぬ。露國の共産思想に就て率直に我々の常識に考へらるゝ事は、第一にレーニンは無産者の生活改善は革命より外に方法なしと獨斷して居るけれども、之は露國にのみ通用する議論であつて、外國に於ては皆其國民性によつて革命なくとも無産者の生活改善は成就し得るのである。第二に無産者獨裁政治を主張するけれども、一國の政治は國民全體の政治でなくてはならぬ、貴族や資本家の獨裁政治が不可なるが如く無産者の獨裁政治も亦不可なる事は勿論である。此の如き明白なる矛盾を主張する所以は、露國の歴史が餘りに無産者を苦しめた故に之が反動として唱へられたるものに過ぎない。第三に働かざる者は食ふべからずと云ふ事は善い事である、併



し乍ら之は畢竟道德的の教義となすべきものである。又働くと言ふ文字は廣義に解しなくてはならぬ、美術家でも商人でも音楽家でも宗教家でも政治家でも教育家でも之を包含しなければ無理である。然るに商人や僧侶などは労働者と認めずと云ふが如き、全たく露國特別の事情に捉はれたる反動行為に過ぎない。第四に共產思想では何人も労働に熱心にはなれぬ、苟も聖人にあらざる限りは、萬人に其勤勉を期待する事が出来ぬ、勤勉して多量に生産しても没收せられる場合には、縦令法律で強制されて働くと云つても唯サポターチで働いてお茶を濁す程度のものである。斯くては刺戟もなければ進歩も無い、發明もなければ工夫も無い、文化が進歩しなくとも人間は唯平等に國家から支給されたものを食つて生きて居れば善いと云ふ事は、人間社會を退化せしむるものである。第五に無産者獨裁政治と

云ふ事は結局全國民をして無産者たらしむる結果となるに相違ない。或る批評家の曰く「露國は革命を成就したけれども専制は依然として専制である、言論の自由も信教の自由もない、労働者の地位も向上しない、又ストライキは國營事業に對する反逆行爲として死刑に處せられる、故に悲惨なる生活は依然として悲惨なる生活である。唯平等に一般的となつた事は富者が無くなつて貧乏が共通になつただけである」之では決して國民全體の幸福が増進されたとは認められないのである。又伊太利の極右的獨裁政治も全たく伊太利の國民性に依りて行はれて居るのであつて、他國では之を眞似る事が出来ない。伊太利人は感情的の熱血兒で建國の當初に於てもガリバルディーが義勇兵を率ゐて、南部伊太利を征服し之をサルチニア王に奉つたと云ふ歴史を有するが如く、ダヌンチオが



詩人として劍を執つてヒューメを占領するが如く、他國人には全く豫想の出来ない事である。即ち今日ムツソリーニの獨裁政治の行はるゝ所以も亦此熱血的英雄崇拜的の國民性に依るものである。全く近代的傾向に逆行して議會を睥睨し言論を壓迫し、労働者の組織的暴行を抑壓し財政策としては、資本を擁護し勞銀に課税し相續税を廢し、專賣を止めて民營とし所謂社會主義的政策を根柢より覆さむとして居るのは、露國の施設と對照して絶好のコントラストを成すものであつて、我々にとつては得難き參考資料である。ムツソリーニの行動は慥かに銳鋒を以て、現代の社會主義的傾向の短所弱點を痛快に貫通せるが如きものであつて、正に啗飲三斗の感がある。併し乍ら痛快は常に眞理では無い、痛快は唯反動的復仇的快感たるに過ぎない。我々は其半面の眞理を看破し能く之を咀嚼し消化して、

自己の國民性に適應せしむるの工夫を爲さなければならぬ。最近世界の國際間の實情を大觀して我々の著しく感ずる事は、從來の國際主義より一轉して民族主義となり、國家主義となつて居る事である。露國の革命の如きは、其理想に於て全く國際的であつたけれども、各國は皆非革命主義であつたので、此頃は著しく右傾して民族主義となり國家主義となつて居る事は、何人も之を認むる所である。伊太利のフワシオ運動が極端なる國家主義なるは説明する迄もない。佛國の如きも唯自國の安全を保つ事のみを目標とし、愛國心を高調して獨逸の復仇に備へて居る。英國の如きも全たく自己本位で漸次佛國を疎んじて獨逸に好意を寄せ、歐洲大陸の經濟回復を圖つて自國の失業者を救済せむと考へ、又軍縮に賛成しながら新嘉坡に海軍根據地を築造して居る。米國の如きも是れ亦自己本位で



あつて國際聯盟を提唱しながら自分は却つて之を脱退し、他國の民族自決を高唱しても自國に於ては印度人を苦しめ、布哇や比利賓の獨立を抑壓し、自由平等を主張するも有色人種を排斥すると云ふ有様である。獨逸の如きは云ふ迄もなく臥薪嘗膽で、如何にすれば賠償金を免れ、如何にすれば國力を回復すべきかを日夜苦心して居る。則ち今や各國は表面では國際聯盟や平和思想の鼓吹で、正義人道の正論が行はれて居るけれども、之は飽く迄も理想である、或は空想である。我々は飽く迄も現實を忘れてはならぬ、理想を有するとしても馬鹿でなくてはならぬ道理が無い。Idealist (理想家)となつても Idiot (馬鹿)となるな」と云ふ言葉は味ふべきものである。我日本は昔からよく外國の眞似をしたと云はれて居る、成る程それも半面の眞理である。或は朝鮮の文化を入れ或は支那の文化を入れ、或は西洋の

文化を入れ實に日本人は「模倣の天才」であると迄云はれて居る。併し乍ら我々の祖先は一時は盲目的模倣を試むる様であつても、直ちに自ら反省し之を咀嚼し消化して、自己の國民性に適應せしむるの用意を忘れなかつたのである。儒教の仁義の教を入れても、禪讓放伐易姓革命の教を排斥して居る、そして孝道は之を入れても、忠君の思想は寧ろ我國特有の發達を遂げて居る、又佛教なども超國家主義で厭世で消極である點を省いて、其幽玄の哲理慈悲の佛道を入れて之を我國體に適應せしむる苦心をして居る。試みに其一例として、弘法大師が眞言宗を傳へ高野山を開くに當つて、金剛峯寺を建立した弘仁十年には之と同時に鎮守明神を勸請し、十二王子百二十社を崇祀した。則ち第一社は丹生都比賣明神(天照皇太神の妹)で第二社が高野御子明神で第三社が總社で十二王子百二十番神を祭り、此三社



を合稱して「御社」と云ひ此御社の拜殿を山王院と云ひ、茲にて神事法樂祈禱を行ふたのである。弘安役の如き外患の際は、僧侶が怨敵退散の祈禱を此殿上にて神に對して行ふのである。今日に於ても此御社は嚴然として高野に奉祀されて居る。又寺の名にも教王護國寺と名づけたり、御修法と云つて毎年一月に時の天皇陛下の御衣を賜はりて玉體安全の祈禱を爲し、今日尙其遺法を京都の東寺に於て嚴修するが如き、如何に其用意の周到なるかを見るに足るのである。又後世水戸學に於ても、和魂漢才を目標とし決して外國に心酔しない、故に弘道館記の一節にも「神州の道を通じて西土の教を資く、忠孝二なく文武岐ならず、學問事業其效を殊にせず、神を敬し儒を崇ひ偏黨ある無し、衆思を集め群力を宣べ以て國家無窮の恩に報ゆ云々」とあり又黃門光圀卿の自作の梅里先生墓碑銘中に「其人と爲りや物

に滯らず、事に動かず、神儒を尊んで而も神儒を駁し、佛老を崇んで而も佛老を排す云々」と記してあるのを見ても、我々祖先は決して不用意に外國を模倣したものでは無いと云ふ事がわかる。大化の新政でも明治の維新でも、皆我國民性に基き皇室を中心として時代に適應するの英斷を爲し遂げたのである。露國の勞農政府は露國でなくては出来ない、伊太利のフアシヨ運動は伊太利で無くては出来ない、英國の自治は英國でなくては出来ないのである。大化の新政、明治維新も亦日本で無くては出来ない事柄である、我々は何處迄も我々の脚に依つて歩まなくてはならぬ。



## 第六章 我國民の進路

考へて見ると我々は近時餘りに物質文明に捉はれて居つた。世界大戦争中に行はれた残忍なる殺人行爲は、慥かに泰西文明に對する我々の尊敬を喪はしめた。爾の隣人を愛せよ、と云ふ教義が何處に行はれて居るのか、右の頬に唾さるれば左の頬を向けると云ふ忍耐は何人が行つて居るのか。我々は仁義を説いて利慾を退けた孔孟の教を支那から學んだ、而も支那の實際は最も利慾を重んずるものなるを知つた。我々は慈悲の大道を佛教に學んだ、而も印度は今や佛教が滅んで居る事を知つた。我々は博愛の教を耶蘇教に學んだ、而も耶蘇教國は爾の隣人を愛せざるものなる事を知つた。「僧

侶の説く所を行へ、僧侶の爲す所を行ふな」とは西洋の諺である。

我々の進むべき道は近きに在り、之を遠きに求むべからず。我々は他人の模倣を爲さずして自己の道を歩むべきである。自己の道とは何ぞや、建國の精神に立還るのである。そして之を時代化するのである。顧みれば我々國民の或者は日本の歴史文學よりも、支那の歴史文學をより多く教へられた、我々國民の或者は東洋の歴史思想よりも、より多く西洋の歴史思想を教へられた、そして自己を知らずして他を知つて居る、而も之を熟知せずして之を半可通に知つて居る。我々の態度は是でよいのであらうか。今や内外の事情は實に我々の反省を促がし來つて居る、我國民性を考へよ、我々の國體に透徹せる理解を持って、そして我々の建國の精神に更生せよ。蓋し天は往々にして其の知らざる間に重大なる任務と無上の光榮とを其人



に授くる事がある、我々が我高明なる建國の精神に目醒むる時、天は我々に東西の文明を消化渾成して以て世界の新文化と人類の平和とを招徠すべき絶大の任務を授けんとして居るのではあるまいか。

建國の精神に還れ (畢)

不許復製

大正十五年一月二十日印刷  
大正十五年二月一日發行

建國の精神に還れ

定價五拾錢

著者	永田秀次郎
發行者	增田義一 東京市京橋區南紺屋町十二番地
印刷者	瀧澤一郎 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
發行所	東京市京橋區南紺屋町十二番地 實業之日本社 電話銀座九九八番 振替東京三二六番

株式會社秀英合印刷



# 青年出世訓

忽ち六版  
定價貳圓  
郵稅十二錢  
四六版クロス製

實業之日本社長  
增田義一著

大阪朝日新聞曰く、處世の要訣として一般青年が先づ志望を選定し、自己の特長を生かし、世の中に出て遭遇するあらゆる人事の問題に對して心得べき事柄などを懇切に講述したもので、説く所公正穩健世の一般青年のため座右の寶典たり得る好著である。

本書は先づ各人共通の缺點を指摘し、其矯正法を説き、進んで立身出世に必要な修養を各方面から縷述し世に處し人に對する態度を教へ東西古今の實例を擧げて具體的に懇説せるものである。(岡山縣立師範學校教科書)

### 略大容内

特長を涵養せよ  
下格第一主義  
熱誠の鍛錬力  
意志の堅強力  
眞劍の開拓力  
運命の思想問題

現代青年と新思想  
地方青年の天職  
青年出世の準備  
青年の勉めよ  
自己の煩悶の豫防  
現青年の勿れ

### 略大容内

弱點の矯正  
粗放の矯正  
近視心の矯正  
嫉妬心の矯正  
良心の買換  
信心の危険  
煩悩の乗る  
自信力の養成  
人物

注意力の養成  
應用力の養成  
綜合力の養成  
獨創力の養成  
大才の涵養  
英氣の涵養  
進歩的人物の養成

# 立身の基礎

二十六版  
定價貳圓貳拾錢  
郵稅十二錢  
四六版クロス製

# 縮刷 青年と修養

六十九版  
定價壹圓五拾錢  
郵稅六錢三六判  
總クロス製函入

實業之日本社長  
增田義一著

青年の心を支配する凡百の煩悶憂惱に對し、最も明快にして適切なる解答を與ふるものは、恐らく著者を外にして他に無からん。本書は最も多く青年に接し、又最も多く青年に同情と親切とを有する著者が、多年の實驗により青年の針路を示せるもの、青年自らの必讀書たるのみならず、亦父兄、教育家先輩諸士の良参考書である。(大阪市調島商塾學校教科書)

### 略大容内

昇給を辭した感ずべき青年事務員  
破産の主家に踏み止つた使用人  
惰夫を起したる奮闘兒  
克己心の修養  
貯蓄心なき爲失敗せる青年  
虚言から破滅する青年  
世渡りに必要な心得  
使用人昇進の秘訣  
結婚問題に煩悶する青年  
義理と情愛に迷ふ青年  
内氣の青年  
昇給運き事務員  
無教育青年發展の途  
光明を失へる青年  
兄弟の不和  
父子の不和  
求職相談者に多き心得  
轉職希望者へ  
就職問題と學校卒業生の非常識  
不振の農村青年へ  
使用人昇進の秘訣  
立身の根柢は奮闘主義  
其他數章

## 思想善導の基準

十八版

定價壹圓五拾錢  
郵稅八錢四六判

## 大國民の根柢

十二版

定價壹圓八拾錢  
郵稅十錢四六判



# 縮刷 修養

百十八版  
定價壹圓五拾錢  
郵稅六錢三六版  
總クロス製函入

農學博士・法學博士  
新渡戸稻造先生著

識古今に互り徳一代に冠たる博士が、五十餘年の學問經驗を傾け、滿腕の熱血を注いで、品性、人格、處世法に互りて懇説せられたるもの、其説明の親切なる、其材料の豊富にして趣味深き、滾々として盡さざる天泉にも比すべし。一度これを緋かば明鏡に向ふが如く、忽ちにして自己の歸趨を自覺し、向上發展の道を體得し得べし。蓋し古今獨ルの名著にして萬人必讀の活經典たり。

### 内 容 大 略

青年の特性……………	余が實驗せる讀書法
青年の立志……………	逆境にある時の心得
職業の選擇……………	順境にある時の心得
決心の繼續……………	世渡りの標準……………
勇氣の修養……………	道……………
克己の工夫……………	默思……………
名譽に對する心態……………	暑中の修養……………
貯蓄……………	迎年の準備……………

縮刷 世渡りの道

七十五版

定價壹圓五拾錢  
郵稅六錢三六判

三百六十五日  
修養 日訓 一日一言

七十三版

定價壹圓貳拾錢  
郵稅四錢三五判

# 修養 隨筆 叱牛錄

忽ち六版  
定價貳圓  
郵稅十錢  
四六判總クロス  
上製本函入

前東京高等商業學校長 坪野平太郎氏著

男爵 阪谷芳郎先生序  
法學博士 添田壽一先生題字  
「坪野君は明治九年以來の親友にして、愛國の志篤き人。不幸病身に於て、大學卒業後、外務通信方面に活動を試みしも、宿痼の爲め驥足を延ぶるを得ず、後懇望せられ高商校長として令名を馳せられたが、之も病の爲體て退かれた。にも拘はらず六十七歳の長壽を保たれたは、全く君の熱心なる信仰より得たる大悟徹底の力に歸する。」とは同窓の親友阪谷男の其の序文中に言へる所、以て著者の人格と信仰とを知るに足る。

青年と人生觀

再版

前東京高師教授 佐々木吉三郎氏著

定價壹圓參拾錢  
郵稅八錢四六判

隨筆 考

錄

五版

樞密顧問官・子爵 石黒忠惠氏著

定價壹圓五拾錢  
郵稅八錢四六判

觀樹將軍縱橫談

再版

陸軍中將・子爵 三浦梧樓氏談

定價貳圓  
郵稅八錢四六判



攝政宮殿下の御覽を賜ふ

▼マーデン博士著・上谷續先生譯の三名著

如何にして希望を達す可きか

四十  
四版 定價壹圓七拾錢  
郵稅十錢四六判  
總布上製函入

著者の論旨によれば、如何に愚鈍視されて居る人も、如何に偉人傑物と稱讃されて居る人も、其人々の心の内に在る魂は同じである。唯偉人は能く自己の魂を働かせるが、愚者はその魂を働かせる事を知らないのである。だから吾々が一度自分の胸底に眠つて居る魂を呼び醒すと、如何なる大業をもなし遂げ得るといふので、本書には専ら其の修養即ち如何にして魂を呼び醒すかの修養法を説いた。

如何にして一身の方向を定む可きか

十六  
定價貳圓  
郵稅十錢四六判  
總布上製函入

如何にして自己の特性を發見し、如何にして自己の適業を選ぶかを知る事は、青年にとつて最も痛切なる必要事である。前著の總論的、内部生活的なるに反して、本書は各論的であり、外部生活的であるが爲め、直接青年諸士を益する事甚大である。

如何にして自己を大成す可きか

近刊 定價未定  
郵稅未定四六判  
總布上製函入

マーデン翁の三部作の最後を飾る大著にして、人生究極の目的たる、自己の大成を説く。付録として「社會教育家としてのマーデン翁」なる一文を添ふ。譯文玲瓏、原著の朗々誦すべき氣品を傳へて遺憾なし。

嫁入文庫

皇各后宮 陛下殿 賜覽台

全拾貳冊 定價各冊八錢 郵稅各冊

第一編 育兒の卷	醫學博士男爵加藤 照麿著
第二編 裁縫の卷	女子高師教授喜多見咲子著
第三編 禮法の卷	實踐女學校長下田 歌子著
第四編 料理の卷	女子大學教授赤堀 栄吉著
第五編 洗濯染色の卷	共立女子職業學校講師山下 榮藏著
第六編 編物刺繡の卷	吉田とく子相川たけ子著
第七編 化粧の卷	古宇田醫學博士 水島幸子著
第八編 娛樂の卷	齋藤 鹿山著
第九編 生花の卷	齋藤 鹿山著
第十編 女中使方の卷	男爵夫人加藤 常子著
第十一編 家政の卷	鳩山 泰子 鳩山 薰子 共著
第十二編 婦人衛生の卷	醫學博士相馬又二郎著

婦人の尊い使命は、家庭の主婦として母として、始めて最も圓滿に且つ最も完全に果されるのであつて、婦人一生の幸不幸は主として結婚後の働きによつて別れると思ひます。故に結婚生活を最も意義あらしめるには、結婚に先立つて先づ第一に主婦として理想的資格を作らねばなりません。本書の如きは若き婦人をして新時代の理想的主婦としての生活に必要な實際的知識に通曉させる最良書です。



運命 判断 **生れ月の神秘** 十二版 山田耕作氏著

天才音楽家として天  
より恵まれたる直感  
力を以て各月生れの  
神秘を語れるもの  
定價壹圓五拾錢  
郵税六錢三六判  
總布上製函入

**鍊 膽 術** 四十版 永平寺前管長  
九版 日置默禪師述

膽力養成程六ヶ敷い  
事は先づない。本  
禪師が鍊膽の好書を  
説いたものである。  
定價七拾五錢  
郵税四錢三六判  
總クロス上製

復利 増進 **資金運用論** 四十版 前關西學院教授  
六版 興梠奎太郎氏著

小資本を以て如何に  
利殖すべきかを如何  
的に例をあげて説明  
せるものである。  
定價壹圓參拾錢  
郵税六錢四六判  
總クロス上製

**經濟記事の讀み方** 百二版 法學士  
細貝正邦氏著

新聞雜誌の經濟記事  
を讀む人への必要な  
豫備知識を與ふ。  
定價壹圓貳拾錢  
郵税六錢三六判  
總クロス上製

**取引相場の知識** 三版 河瀬蘇北氏著

取引相場の一般的知  
識を誰にもよく解る  
ために説明されたもの  
である。  
定價壹圓五拾錢  
郵税六錢三六判  
總クロス入

練習 圖解 **壯快なるスキー術** 新刊 近衛直磨氏著

スキー術を獨習出來  
る様圖解入にて極平  
易に説明せしめて、類  
中の白眉である。  
定價壹圓參拾錢  
郵税六錢三六判  
總布製函入

**生活 戰 術** 二十版 法學博士  
二版 浮田和民氏著

「書生學」生活競争  
の新戰術、組織的  
の協力、等を含み、  
青年の絶好の處世鑑  
なり。  
定價壹圓五拾錢  
郵税六錢三六判  
總クロス入

**勝利への路** 三版 法學博士  
浮田和民氏著

前書の姉妹篇にして  
著者獨特の處世哲學  
より、人生の戰場的方  
面を力説せるもの。  
定價壹圓七拾錢  
郵税八錢三六判  
總クロス製函入

奮闘 活曆 **裸一貫から** 二十版 實業編之日  
二版 實業編之日

武藤、和田、神戸、  
藤山、岡、大川、山  
下、小池、馬越、山  
部、三輪、其他十六  
名士の奮闘傳。  
定價壹圓七拾錢  
郵税八錢四六判  
總クロス製函入

獨立經營 最新の **一萬圓儲け迄** 八版 實業編之日

僅少の資本を以て、  
開業幾何もならずし  
て一萬圓を儲けし迄  
の苦心實話二十四篇  
を集む。  
定價壹圓七拾錢  
郵税八錢四六判  
總クロス製函入

奮闘 活曆 **血涙のあと** 三版 實業編之日

木村、佐々木、藤原  
其他の財界の名士の  
奮闘を拉し來り其の十  
七名を口授筆録せし  
しもの。  
定價壹圓七拾錢  
郵税八錢四六判  
總クロス製函入

**成功座右銘** 新刊 實業編之日

「斯の如き青年は必  
ず成功す。斯の如き  
青年は必ず失敗す。如  
きの二十項に分ちて全  
書の三十六項を收む。  
定價四拾錢  
並製貳拾五錢  
郵税各一錢



無病長壽健康増進法

新刊

ドクトル、オブ、カ  
イロブラクテイカ  
大澤昌壽氏著

定價壹圓八拾錢  
郵稅八錢三六判

胃腸の新しい衛生

四版

醫學博士  
杉本東造氏著

定價壹圓五拾錢  
郵稅六錢三六判

腦の衛生

九版

醫學博士  
櫻田十次郎氏著

定價九拾錢  
郵稅四錢菊半型

腎臓炎と糖尿病

十三版

醫學博士  
菊池林作氏著

定價九拾錢  
郵稅四錢三六判

素人病氣の特徴調べ

三版

健康相談所長  
伊藤尙賢氏著

定價貳圓五拾錢  
郵稅八錢三六判

藥になる食物と病人の食物

十二版

健康相談所長  
伊藤尙賢氏著

定價壹圓七拾錢  
郵稅八錢四六判

自彊術の解説と實驗談

五十三版

十文字大元氏著

定價九拾錢  
郵稅四錢三六判

安産の棗

三十二版

醫學博士  
伊庭秀榮氏著

定價壹圓七拾錢  
郵稅十四錢菊判

小兒の家庭看護と應急手當

再版

醫學博士  
長尾美知氏著

定價壹圓六拾錢  
郵稅八錢四六判

改新版 新らしい言葉の字引

百廿七版

服部嘉香氏共著  
植原路郎氏共著

定價貳十錢

新らしい外來語の字引

三版

田中孝一郎氏著

定價壹圓五拾錢  
郵稅六錢

新らしい政治制度の字引

三版

河瀬蘇北氏著

定價壹圓五拾錢  
郵稅六錢

新らしい商業經濟の字引

十二版

河瀬蘇北氏著

定價壹圓七拾錢  
郵稅六錢

新らしい世界常識の字引

六版

河瀬蘇北氏著

定價貳八錢

新らしい主義學說の字引

三十二版

勝屋英造氏著

定價參八錢

新らしい法律知識の字引

近刊

高橋北堂氏著

定價未定

新假名遣と常用漢字の字引

新刊

三並健作氏著

定價貳八錢

新らしい言葉  
通な言葉  
故事熟語  
社交用語の字引

新刊

鈴木一意氏著

定價壹圓七拾錢  
郵稅六錢



# 日本少年

月一回發行(十日頃)  
 定價 四十錢  
 郵税二錢増大號五十錢  
 半年分郵税共貳圓六  
 十錢 一年分郵税共五圓

建國青少年諸君の課外讀本熱血奮闘の精神全誌に漲る

滿天下青少年諸君の自熱的歡迎!!!  
 はち切れさうな元氣とせい一杯の奮闘と溢れるばかりの面白味とを湛えた日本少年は到る處素晴らしい歡迎、素晴らしい評判です  
 先生や父兄方からも賞讚!!!  
 最も教育的に最も面白く編輯されてゐると云ふので教育家や父兄方の大賞讚を博して居ります  
 面白くて爲になる科學少年小説冒險探偵滑稽大讀物滿載! 毎月大懸賞あり

東京市京橋區南紺屋町  
 實業之日本社  
 振替口座東京參貳六

# 趣味と實益の雜誌 東京

萬人向の新しい趣味と實益記事滿載

- 花形揃ひの小説講談落語 (一粒撰りの傑作 大讀物滿々載)
- 立志美談奮闘物語大活躍 (一讀感憤奮起せ ずにはゐられぬ)
- 公平無私骨を刺す人物評 (時の花形人物評 は最も定評あり)
- 社會政治家庭科學の記事 (社會記事は本誌 獨特で大評判)
- 學生、運動、劇、映畫、詩歌 (いづれも新しい 記事讀物揃ひ)
- 經濟、利殖、修養の記事 (直ぐ役に立つ 實益記事滿載)

學生、會社員、地方青年、商人、紳士、官吏、老人、婦人、子供誰にも向いて大歡迎!  
 東京市京橋區南紺屋町  
 實業之日本社  
 振替口座東京參貳六番

毎月五日頃發行  
 定價 四十錢  
 郵税二錢特大號五十錢  
 半年分稅共二圓四十錢



# 實業講習白録

僅か一年で

甲種商業學校卒業  
 同等の學力を獨修  
 向上の道に迷へる諸君  
 立身に燃ゆる青年諸君  
 大志を抱く獨學者諸君  
 茲に理想の獨學機關あり  
 毎月新會員を募集す  
 即刻躊躇なく入會あれ  
 (小學卒業程度の學力の人  
 男女誰でも入會出来ます)

實業戰士の必須科目許り  
 講義は假名附で平易親切  
**講習廿四科目**

- 商業通論
- 商業各論
- 經濟學
- 財政學
- 法制講話
- 商業簿記
- 銀行簿記
- 工業簿記
- 商業英語
- 商品學
- 商業地理
- 商業數學
- 珠算と暗算
- 店頭裝飾法
- 商業作文
- 商店實務
- 廣告學
- 商業心理學
- 銀行常識
- 工場實習
- 實用習字
- 商業道德
- 青年の修養
- 科外講話

總裁 子 澁澤榮一  
 會長 增田義一

**十大特色**  
 講習廿四科目は一粒選り  
 讀めば直ちに役に立つ  
 僅一ケ年で卒業出来る  
 講師は博士や大學教授  
 講義が平易で誰にも解る  
 解る迄責任を以て教へる  
 大家の科外講話がある  
 毎月相當の奨學金を提供  
 役員は皆當代名流揃ひ  
 卒業證書を差上げます

**會費**

一ヶ月	壹圓八十錢
三ヶ月	貳圓參十錢
六ヶ月	四圓
一年	九圓六十錢

會費は三ヶ月以上前納が  
 割引があつてお得です

東京市橋區 實業講習會 本社  
 東京市橋區 實業講習會 本社  
 東京市橋區 實業講習會 本社

# 婦人世界

婦人雜誌  
 界の女王

『二戸に一冊婦人世界』といふそれはく素晴らしい  
 評判、御家庭や御知り合ひの御婦人にして非くおす  
 すめ願ひ上げます。

あらゆる婦人問題を指導し、すぐ役に立つ家庭實用  
 記事、一粒撰りの小説、婦人必讀の重要記事を満載!

少女の友  
 幼年の友

十日頃發行 價四十錢  
 八日頃發行 價四十錢  
 郵税二錢  
 郵税一錢

少女の情換教育に適ふ優しき少女物  
 語を満載した雑誌界の花形全國少女  
 の間に大歡迎皆様にお勧め下さい  
 幼稚園から小學二三年迄の兒童が大  
 喜びの理想的課外讀本面白い爲にな  
 る童話童話満載ぜひ毎月お與へ下さ

毎月十五日頃發行  
 定價 五十錢  
 郵税三錢  
 號六十錢  
 郵税共三圓廿錢

東京市橋區 實業講習會 本社  
 東京市橋區 實業講習會 本社  
 東京市橋區 實業講習會 本社



# 實業界之日本

月一回發行(十五日)  
 定價三拾錢  
 郵税一錢五厘  
 定價六十錢  
 四圓十錢  
 一年八圓十錢

國民必讀  
 の修養雜誌!!!  
 奮闘家のホケッ  
 トに必ず  
 本誌あり

- 實業國民の精神修養……學界實業界官界諸名士の修養法を滿載す
- 最新時事問題の解説……實業界の有ゆる問題を公正に批判報道す
- 海外新智識を報道す……商人事業家の見落しならぬ新發明の記事
- 時の花形たる人物評……本誌の人物評は最も公正であるとの評判
- 現代成功者の奮闘傳……刻苦奮闘の實傳を掲げ若人を感奮せしむ
- 安全利殖法の好指針……實際の調査による利殖法で幸福の基です
- 醫學界權威の健康法……衛生記事や有ゆる病氣の手當法を説明す

全國の書店にあり賣切れの際は本社へ御注文願ひます

東京市京橋區南紺屋町  
**實業之日本社**  
 振替口座東京參貳六



~~2~~ 2



終